

東京大学さつき会奨学金10周年記念事業報告書

2023年11月

さつき会奨学金委員会

目次

| | |
|--------------------------------|----|
| はじめに..... | 1 |
| 1 東京大学さつき会奨学金の概要とこれまでのあゆみ..... | 2 |
| 2 東京大学さつき会奨学金10周年記念フォーラム..... | 10 |
| (1) プログラム..... | 10 |
| (2) 参加者..... | 10 |
| (3) 当日の様相..... | 11 |
| (4) パネルディスカッション第1部の資料..... | 14 |
| (4)-1 佐藤健二様資料..... | 14 |
| (4)-2 井上敦様資料..... | 19 |
| (4)-3 川崎莉音様資料..... | 23 |
| 3 東京大学さつき会奨学金制度創設時の思い出..... | 35 |
| (1) 江川雅子..... | 35 |
| (2) 杉山健一..... | 38 |
| (3) 市川賀一..... | 39 |
| (4) 小山優菜..... | 40 |
| (5) 菊地敦子..... | 44 |
| (6) 永沢裕美子..... | 46 |
| (7) 大里真理子..... | 51 |
| (8) 筑本知子..... | 55 |
| (9) 中西彩子..... | 61 |
| あとがき..... | 63 |

はじめに

2013年4月、3000万円余の寄付金と3名の奨学生でスタートした東京大学さつき会奨学金は、2023年4月には寄付総額は5億円を超え、奨学生総数は86名となりました。

これまで寄付をくださった391名の方々、高校予約型という前例のない制度を設計してくださった東京大学当局の方々、そして、奨学金を利用して東大を受験すると決意した受験生の方々、すべての関係者に感謝いたします。

さつき会は、東京大学に学生として籍を置いたことのある女性の同窓会です。1961年の創立時の女子学生比率はわずか2%でした。その後、女子学生比率は増加したものの、20%を目前にして20年ほど停滞してしまいます。いわゆる「2割の壁」です。さつき会奨学金は、少しでも後輩の東大女子を増やしたいとの思いから、地方の女子高校生に狙いを定め、「自宅外通学」を要件として設計されました。

大変ありがたいことに、東京大学基金の中に置かれたさつき会奨学金基金への寄付はこの10年間で大幅に増え、採用学生を順次拡大することができ、奨学生 OG のコミュニティも育っています。

制度創設10年を経たいま、さつき会奨学金のこれまでの歩みを記録にまとめ、どんな学生が育っているのか寄付者の方々にご報告するとともに、女子学生を増やす効果や課題について検討する機会を持ちたいと考え、10周年記念事業を実施することとしました。

記念事業は、(1)さつき会奨学金の記録、(2)記念フォーラム、(3)制度創設に関わった方々からの寄稿、の3つから成り、本報告書がその取りまとめとなります。

東京大学社会連携本部や奨学厚生課の皆様には、さつき会奨学金の運営を担っていただいているとともに、本記念事業の実施に当たって多大なご協力を賜りました。改めて御礼申し上げます。

奨学生たちの輝かしい未来に期待し、東大女子のますますの発展を祈念いたします。

さつき会 奨学金委員会

I 東京大学さつき会奨学金の概要とこれまでのあゆみ



さつき会奨学金のあゆみ

2023年10月1日

1

目次

- 1 制度創設の経緯と趣旨
- 2 さつき会奨学金の概要
- 3 奨学生採用数
- 4 奨学生の出身高校・入学科類・進学先
- 5 奨学生の進路
- 6 入学後のサポート、活動など

2

1 制度創設の経緯と趣旨

2011年、東日本大震災被災者特別援助奨学金（一時金）を支給するとともに、さつき会設立50周年を機に、女子学生のための奨学金制度を企画
2012年、東大基金内にさつき会奨学金基金を設け、制度発足

さつき会奨学金の目的

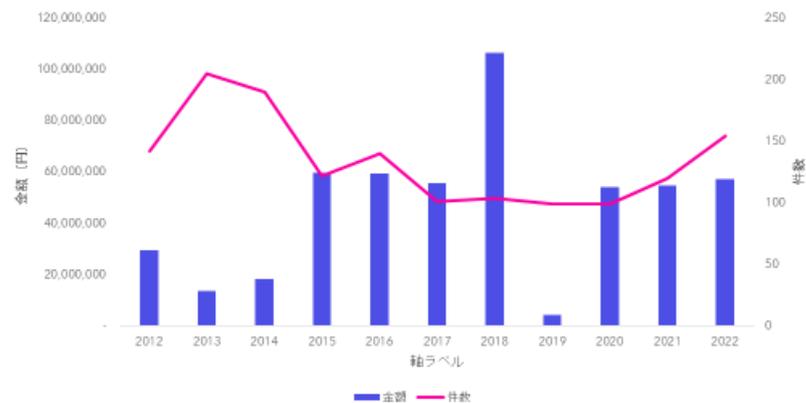
優秀な女子の東大受験を促し、入学後の経済的・精神的なサポートを行うことを通じて、次世代を担う女性をより多く輩出すること

役割分担

東京大学基金事務局：寄付金の管理、寄付者への礼状送付・特典案内
東京大学奨学チーム：制度の告知、給付申請の受付、奨学生の選考、奨学金の振込
さつき会：寄付金募集、奨学生の選考に参加、奨学生との面談

3

さつき会奨学金基金寄付申込み状況



4

制度の沿革

- 2011年 東日本大震災被災者特別援助奨学金（一時金）を支給（3名）
- 2012年 さつき会奨学金制度創設
- 2013年 第1期生採用（3名）
- 2015年 島村昭次郎記念口発足（学部1年生対象）
- 2016年 島村口採用開始
- 2017年 大学院進学者に支給開始
- 2019年 さつき会緊急奨学金制度（一時金）
入学支援金支給開始
- 2020年 さつき会応援奨学金制度（一時金）
- 2021年 支給額を月額3万円から5万円に増額
島村口の募集対象者を学部全学年（進級進学予定者）に拡大

5

2 さつき会奨学金の概要

（1）高校予約型

対象者：①自宅外通学予定の女子 ②学力・人物とも優秀で、経済的支援を必要とする者

選考方法：①高校経由の応募（校長の推薦） ②作文

支給金額 5万円/月 × 標準修業年限（4年間又は6年間）返済不要
入学支援金30万円

（2）島村昭次郎記念口

対象者：①在学中の自宅外通学の女子学生で、学部2年～4年に進学予定又は大学院修士課程に入学予定の者 ②学力・人物とも優秀で、経済的支援を必要とする者 ③卒業高校の校長等の推薦

選考方法：①作文 ②面接

支給金額：5万円/月×標準修業年限終了まで 返済不要

6

3 奨学生採用数



7

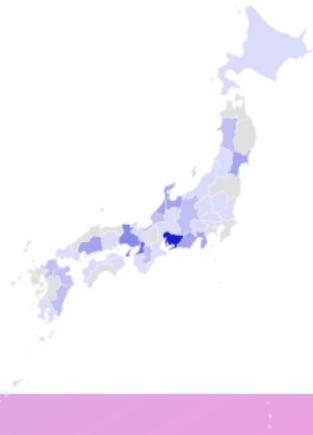
3 奨学生採用数（2023年度は実に21名）



8

4 奨学生の分類 (1) 出身高校所在都道府県

人数 1 8



| | |
|----|-----------------------------|
| 8人 | 愛知県 |
| 5人 | 大阪府 |
| 4人 | 兵庫県 |
| 3人 | 宮城県、静岡県、石川県、富山県、広島県 |
| 2人 | 秋田県、長野県、福井県、奈良県、福岡県、大分県、宮崎県 |

9

4 奨学生の分類 (2) 入学時の科類

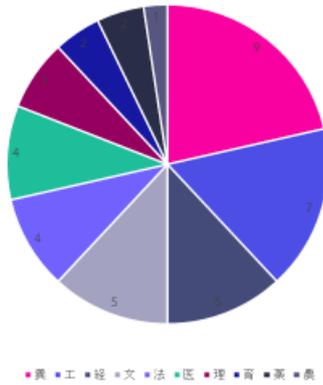


| 科類 | 人数 | 割合 |
|----|----|-----|
| 文Ⅰ | 11 | 17 |
| 文Ⅱ | 8 | 12 |
| 文Ⅲ | 21 | 32 |
| 理Ⅰ | 8 | 12 |
| 理Ⅱ | 14 | 22 |
| 理Ⅲ | 3 | 5 |
| 総数 | 65 | 100 |

10

4 奨学生の分類 (3) 進学先

進学者42名の所属学部

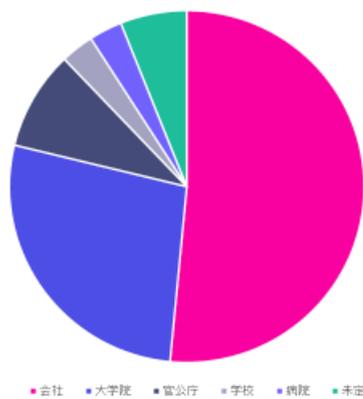


| | |
|----|---|
| 教育 | 9 |
| 工 | 7 |
| 経 | 5 |
| 文 | 5 |
| 法 | 4 |
| 医 | 4 |
| 理 | 3 |
| 教育 | 2 |
| 業 | 2 |
| 農 | 1 |

11

5 学部卒業後の進路

学部卒業生33名の進路



| | 人数 | 割合 |
|-----|----|-----|
| 会社 | 17 | 52 |
| 大学院 | 9 | 27 |
| 官公庁 | 3 | 9 |
| 学校 | 1 | 3 |
| 病院 | 1 | 3 |
| 未定 | 2 | 6 |
| 総数 | 33 | 100 |

12

6 入学後のサポート、活動など

- 受給証書授与式
- さつき会奨学金委員会で年1回面談（対面&zoom）
 - 7-8人／1回で数回に分けて開催（10月-11月）
 - 近況報告
 - 奨学生の交流
- LINEグループ「さつきっ子」
- 卒業校訪問制度
 - 奨学生が卒業校を訪問して、説明会を開催
 - 旅費、日当のサポート
- 卒業を祝う会

自宅から通えないので**経済的負担が心配!**という女子受験生へ

東京大学 さつき会奨学金の ご案内



申請期間 毎年11月上旬 (下記サイト参照)

さつき会奨学金の
5つのポイント

01 自宅外通学
予定の女子
が対象

02 返済不要
(給付型)
5万円/月▶4年間
※6年制の課程は6年間・修士進学の場合は修業年限まで

03 出願前に
採用予定がわかる
予約型奨学金

04 入学支援金
30万円
を支給

05 東大女子の
先輩による
生活・進路相談

申請者の資格 入学後に自宅外から通学せざるをえない者であり、経済的な支援を必要とする者
(詳細については、下記Webにて募集要項をご確認ください。)

応募方法 原則として卒業高校校長経由での応募となります。 **採用人数** 最大 30名程度
作文、経済基準等の書類審査により選考します。

奨学生の声

Y.Aさん (石川県 文川)

この奨学金をいただけたことで経済的余裕と心の余裕を得ることができ、自身が更に成長する機会に役立てることができています。また、他の女子学生や先輩の女性方と出会うことができて非常に心強いです。

Y.Mさん (大阪府 理)

さつき会の中で、将来の方向性が似ている奨学生と出会うことができ、大学生活一般だけでなく進学選択やその後のキャリアのことも話し、相談できる仲間を得ることができました。

H.Mさん (愛知県 文川)

一人暮らしと並行して学業や部活に精を出すことは時に辛くもありますが、人生で最も多くのことを学び、成長することができていると感じています。さらに日々を充実させるチャンスをいただいたと身の引き締まる感があります。

K.Jさん (大阪府 理)

さつき会の奨学金を有効活用して、わたしはこの学生生活中に、旅行や、資格の取得、国際交流活動などなんでも挑戦してみたいと思います。そして将来は自分の能力を発揮できる職業に就きたいです。



詳細および
応募書類はこちら



さつき会奨学金



さつき会奨学金は、経済的問題から、東大への進学をためらっている後輩を支援したいという、さつき会(東京大学女子ネットワーク&コミュニティ)の思いから生まれました。

https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/welfare/h02_12.html

2 東京大学さつき会奨学金10周年記念フォーラム

2023年10月1日(日)13:30-16:30

東京大学駒場キャンパス内 駒場ファカルティハウスセミナールーム

(1) プログラム

- ・主催者挨拶 奨学金委員会委員長 大里真理子
 - ・さつき会奨学金のあゆみ 奨学金委員会委員 筑本知子
 - ・パネルディスカッション第1部
「東大女子比率をさらに引き上げるために超えなければいけないハードルとは？」
登壇者:東京大学執行役・副学長 佐藤健二様
NIRA 総合研究開発機構研究コーディネーター・研究員 井上敦様
東京大学#YourChoiceProject 代表 川崎莉音様
ファシリテーター:さつき会奨学金委員会委員長 大里真理子
 - ・パネルディスカッション第2部
「手渡したバトン——奨学生の描く未来」
登壇者:帝國製薬(株)代表取締役社長 藤岡実佐子様(さつき会会員)
奨学生 法学部3年 澤菜倫
奨学生 理科Ⅱ類2年 石垣心
ファシリテーター:さつき会スカラー・奨学金委員会委員 中西彩子
- (休憩)
- ・懇親会

(2) 参加者

- ・寄付者 9名
 - ・来賓 7名(津田敦東京大学理事副学長ほか)
 - ・奨学生 15名
 - ・さつき会役員 13名(金澤亮子代表幹事ほか)
- (このほか、藤垣裕子理事副学長から祝電を頂戴した)

(3) 当日の様様

- ・会場では、6つのテーブルに寄付者と奨学生が混ざって着席しました。
- ・前半は、スカラー（奨学生 OG）である奨学金委員の司会により、主催者挨拶、さつき会奨学金のあゆみの紹介の後、パネルディスカッションを行いました。
- ・パネルディスカッション第1部では、最初に、学部入学者に占める女子学生の比率が長く停滞している、いわゆる「2割の壁」に関し、3人のパネリストが資料に基づきプレゼンを行い、次に、「セカンド・トライ」のジェンダー格差についてどう考えるか、意見交換を行い、最後に、地方の女子高校生の背中を押す施策にはどのようなものがあるか、知恵出しをいただきました。それぞれ調査結果を踏まえた具体的な事実のご紹介と率直なご意見が交わされ、大変に濃密な議論でした。



- ・パネルディスカッション第2部では、奨学生2名から、学業、部活、アルバイトなど学生生活の様子の紹介があり、スカラー（OG 奨学生）から進路の紹介があり、次いで、藤岡さんから、さつき会奨学金に寄付をされた経緯や、ご自身でも財団を運営して奨学金給付を始めた思いを伺いました。そして奨学生には将来の夢を聞きました。



・後半は、別のスカラー委員に司会が交代し、さつき会代表幹事の挨拶、津田理事副学長の来賓ご挨拶の後、寄付者の文野千年男様の御発声で乾杯しました。



・懇親会では、まず、参加した奨学生一人一人に1分間スピーチをしてもらい、それからテーブルごとに懇談となりました。パネリストを含め、来賓の皆様も各テーブルに入ってくださいました。



(4) パネルディスカッション第1部の資料

(4) - 1 佐藤健二様資料

さつき会奨学金
10周年記念フォーラム

東京大学の 女性学生比率の現状

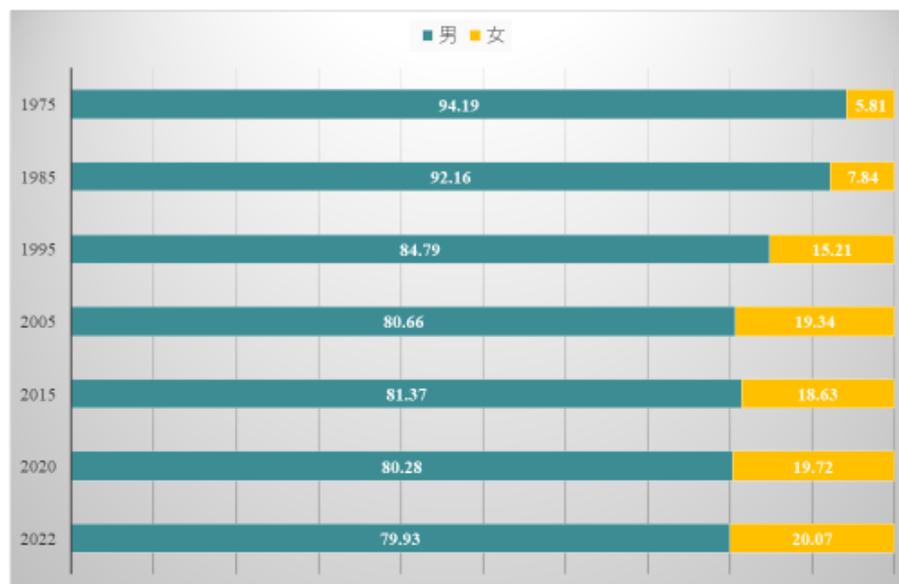
佐藤健二
東京大学副学長



Copyright 2007 Sat ō Kenji. All Rights Reserved.

学部学生全数の男女割合

No.2 /8



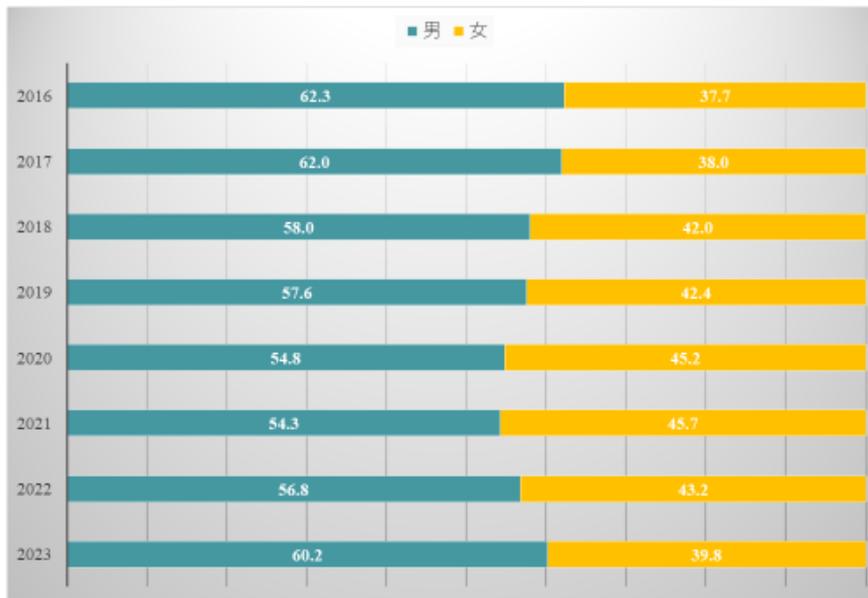
科類別の女性入学者比率 2023

No.3 /8



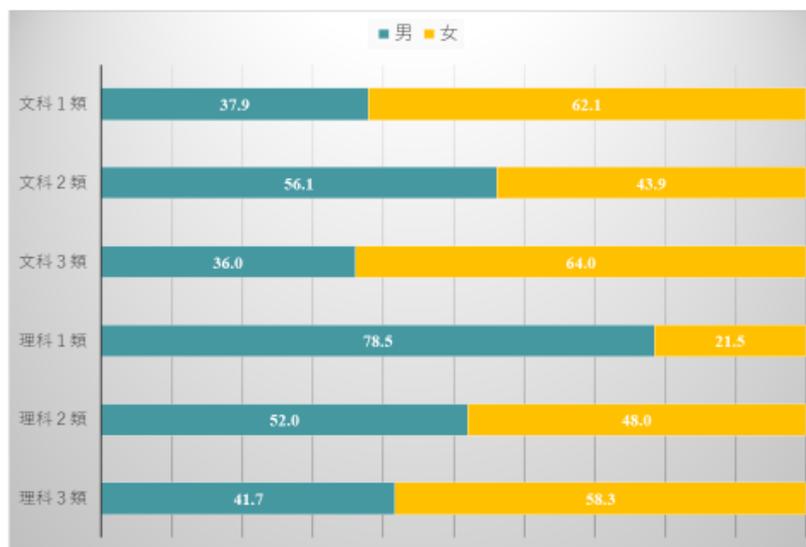
学校推薦型入試の女性比率

No.4 /8



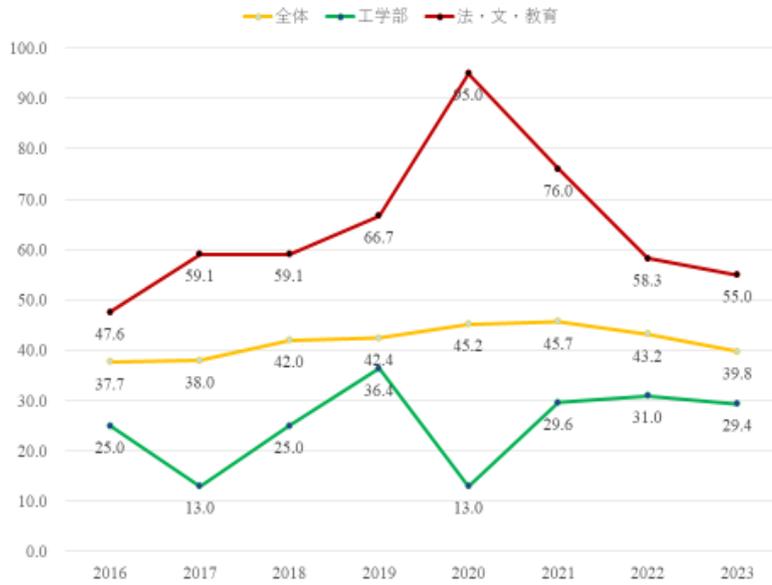
学校推薦型入試（8年間の実績）

No.5 /8



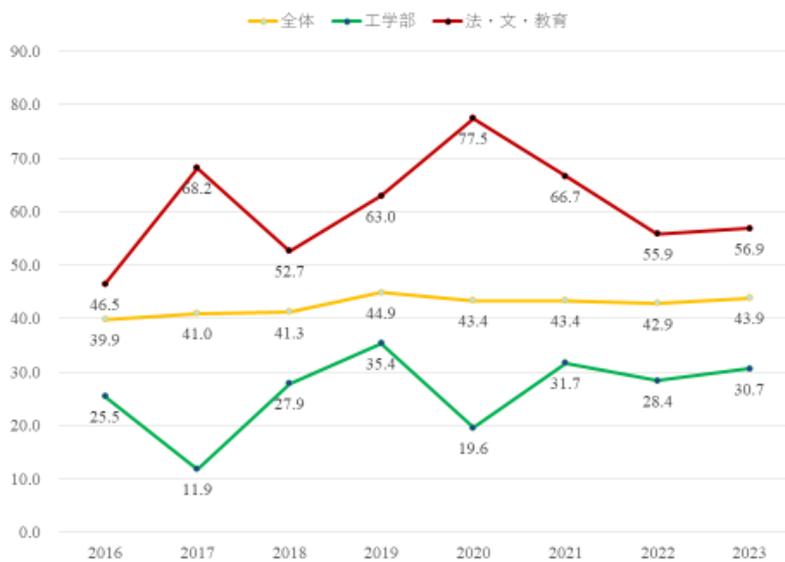
学校推薦型入試（合格者女性比率）

No.6 /B



学校推薦型入試（志願者女性比率）

No.7 /B



女性学生比率の現状

No.8 /8

- 学部学生：1975年の5.8%→20年後 約17%→20年後 約21%
- 入学者：2023年の女性比率 22.6%
しかし、科類でみると大きな差異。**文Ⅲ** 41.4% **理Ⅰ** 9.0%
- 学校推薦型入試：多様性・試験成績以外を重視。女性比率の向上当初より、全体として4割前後の女性比率を保っている
ただし、科類でみると差がある。**文Ⅲ** 64.0% **理Ⅰ** 21.5%
- 学校推薦型入試：経年変化は志願者・合格者の両方をみるなら、科類の統計は整備されておらず、部局別での把握になるが、**法・文・教育学部**で高く、**工学部**で低い傾向がみられる。
- 学務システムデータの分析から：
 - ①文Ⅰ・文Ⅱは南関東（首都圏）の女性学生が増加。
理Ⅱはむしろ他地域が増え、理Ⅲは関西が増えた（2023）
 - ②2004～22の分析からは、一般的に南関東が増加、男女ともに他地方が減少。男性のほうがその傾向が強い。
 - ③名門男子私立校の共学化による関西の増加。
地方伝統公立高校からの減少という傾向。

なぜ理系選択する女子は少ないのか

井上 敦
NIRA総合研究開発機構 研究員
東京大学さつき会奨学金10周年記念フォーラム
2023年10月1日

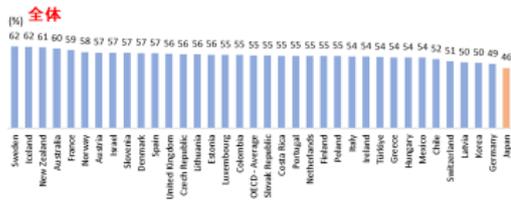
専攻選択の重要性

- ミクロレベル
 - 職業選択、将来所得を左右する
- マクロレベル
 - 将来の知識、スキルの分布を左右する

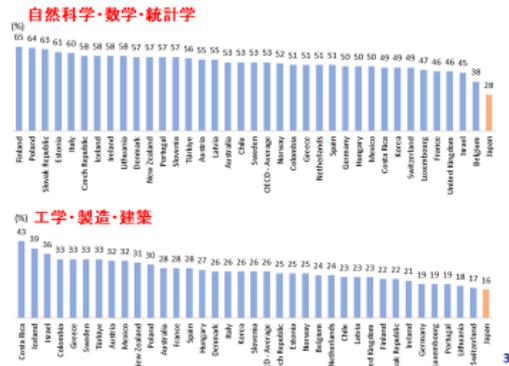
進路選択の男女差

- 女子の四年制大学、理工系分野への進学率が低い

【大学学部入学者に占める女子割合】



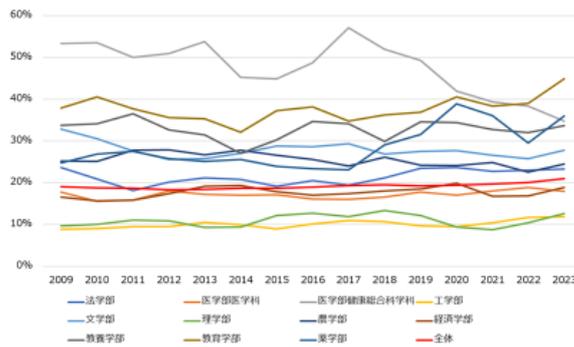
【大学学部入学者に占める女子割合】



(出所) OECD.Stat (2023年9月22日アクセス)

東大(学部)の女子割合

- 東大の女子割合は、2023年度時点で21%、特に理学部、工学部、医学部医学科、経済学部が低い

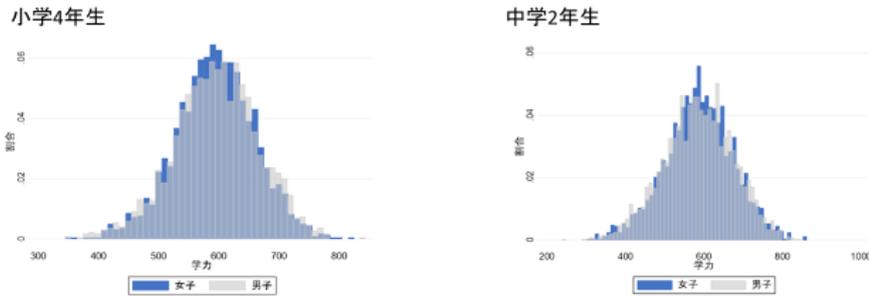


(出所) 東京大学ホームページ「学生数の詳細について」の学部学生数の5月時点のデータを用いて作成。 <https://www.u-tokyo.ac.jp/students/edu-data/608.02.01.html>

学力に男女差があるのか？

- 全体で見ても、成績トップ層に限っても、男女間に大きな違いはない

【国際数学・理科教育調査 (TIMSS) における算数、数学の日本の結果】



(出所) 国際数学・理科教育調査 (TIMSS) の2015年調査データを用いて作成

5

「社会風土」という障壁

- 性別役割分担意識
- 学問分野のジェンダーイメージ
 - これらは、本人や親の願望、期待を形成するため、女性の大学進学、理系選択を阻む見えない障壁となりうる

研究成果の詳細はこちら→

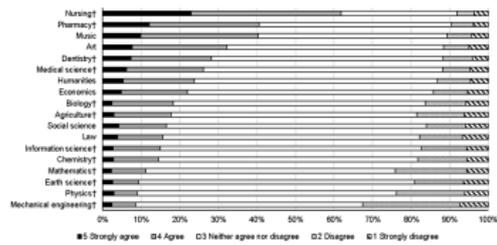


6

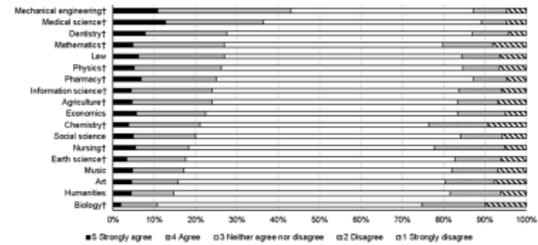
学問分野のジェンダーイメージ

- 看護、音楽、芸術、人文は女性向き、機械工学、数学、物理は男性向きという思い込み

(a) Do you think women are suited to this field?



(b) Do you think men are suited to this field?



(出所) Ikhtai, Y., Minamizaki, A., Kano, K., Inoue, A., McKay, E., & Yokoyama, H. M. (2020) "Gender-biased public perception of STEM fields, focusing on the influence of egalitarian attitudes toward gender roles," *Journal of Science Communication*, 19(1), A08.

7

障壁を取り払う情報とは？

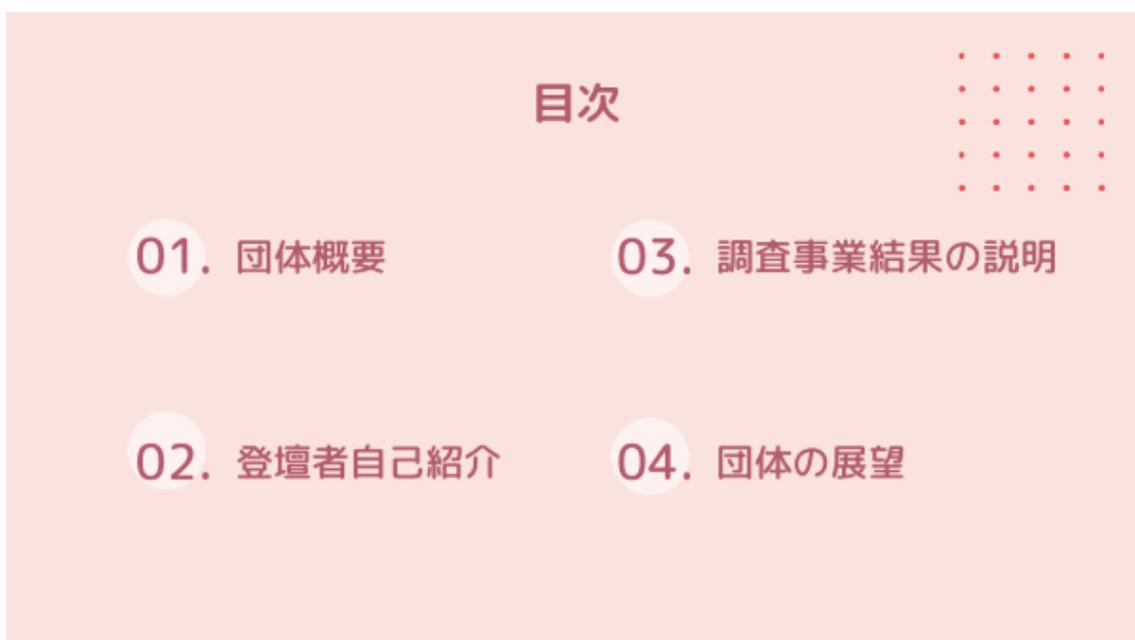
- (A)理工系就職ニーズあり+(B)男女平等社会の重要性
 - (A)理工系就職ニーズあり+(C)男女間で数学の学力差がない
- の情報を受けた中学生は、男女ともに、理工系への進学意欲が向上



(出所) Ikhtai et al. (2021)の結果を基に作成したもの。
Ikhtai, Y., Inoue, A., Minamizaki, A., Kano, K., McKay, E., & Yokoyama, H. M. (2021). Effect of providing gender equality information on students' motivations to choose STEM. *PLoS one*, 16(6), e0252710.

8

(4)-3 川崎莉音様資料



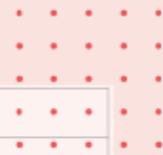
01.

団体概要

#YourChoiceProject
(2021.11~)



#YourChoiceProject



| | |
|------|---|
| 団体名 | #YourChoiceProject |
| 設立 | 2021年11月 |
| 構成員 | 25名 |
| 団体概要 | <p>「全ての学生が生まれついた地域や生まれ持ったジェンダーにかかわらず、自由な進学選択・キャリア選択ができる社会の実現」を目指して活動。</p> <p>① 地方女子の進学の選択肢を広げる ② 地方女子を取り巻く課題を社会化し、環境を変える</p> <p>のMissionを掲げ、コミュニティの運営、調査や政策提言などに取り組む。</p> |



#YourChoiceProject

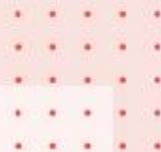
02.

登壇者自己紹介

代表：川崎莉音
共同代表/調査事業責任者：江森百花



登壇者自己紹介



代表
川崎 莉音 (かわさきりおん)
東京大学 法学部 第一類4年
兵庫県出身

共同代表/調査事業責任者
江森 百花 (えもりももか)
東京大学 文学部 社会心理学専修4年
静岡県出身



調査事業結果の説明

2023年5月公表
「なぜ、地方女子は東京大学を目指さないのか」



地方女子学生はとても少ない



東京大学の女子比率：22.7%（2021年度）

→地方女子比率：9%（2021年度）

京都大学の女子比率：22.3%（2022年度）

東京工業大学の女子比率：13%（2022年度）

今回使った統計手法

t検定：対応していない独立した二群の平均値に差があるかどうかを調べる検定方法

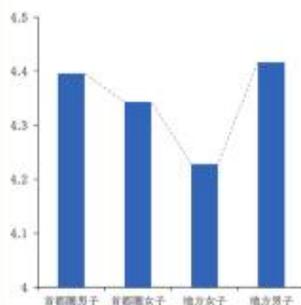
「二群の平均点は同じである」ことを棄却
→「二群の平均点には差がある」ことを立証する

分散分析：一元配置分散分析を使用。独立した三郡以上の平均値に差があるかどうかを調べる検定方法

今回、有意水準は5%に設定 ($p < .05$ であれば、95%の確率で差があるといえる)

地方女子は東大進学にメリットを感じない

偏差値の高い大学に進学することを
有利と感じる程度 (1~5)



設問：

偏差値の高い大学に行くことは自分の目指す将来にとって有利だと思うか（五件法）

首都圏女子 vs 首都圏男子： $t(362) = 0.82, p = .41$

地方女子 vs 首都圏女子： $t(1066) = 2.76, p < .01$

地方女子 vs 地方男子： $t(2784) = 6.07, p < .001$

- 地方では「東京大学などの偏差値が高い大学へ行くことそのものにメリットを感じているか」に性差がある
- ・女子の中でも、首都圏か地方かで意識に差がある

地方女子は資格取得を重視

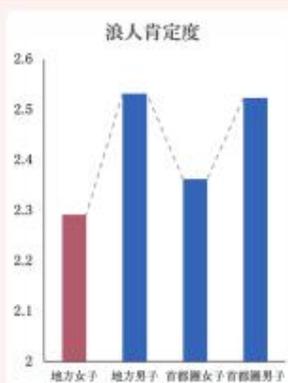
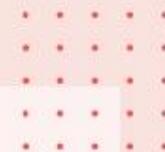


設問：
資格のある職業に就くことは自分の将来にとって大事だと思うか

女子 vs 男子： $t(3659) = 2.10, p = .035$
地方 vs 首都圏： $t(1117) = 3.73, p < .001$

→男子より女子、首都圏より地方の方が資格のある職業を目指す傾向が強い

地方女子は浪人を回避

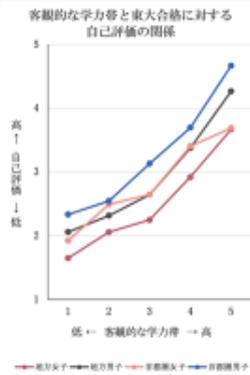


設問：
自分が志望する大学に行くためなら浪人したいと思うか（五件法）

首都圏女子 vs 首都圏男子： $t(365) = 1.62, p = .11$
地方女子 vs 地方男子： $t(2895) = 5.56, p < .001$

→地方では男子より女子の方が浪人を回避する傾向がある

地方女子は自己評価が低い



設問：

・客観的な学力帯

→「自分の成績は学年の中でどれくらいだと思うか」（10段階で評価）
 「自分の高校にいる人で、東大に入学できる可能性が高い人は上位何%以上の人だと思うか」（5%, 10%, 20%, 40%, 60%）
 から重みづけして設定

・自己評価

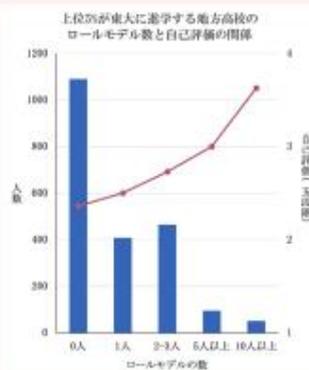
=「あなたが今、東大志望だと仮定した時、今後努力すれば東大に合格できると思うか」（五件法）

地方女子 vs 首都圏女子： $t(1001) = 6.86, p < .001$

地方女子 vs 地方男子： $t(2937) = 10.14, p < .001$

→同じ学力帯の人では、地方女子が首都圏女子・地方男子に比べて自己評価が低い

ロールモデル数と自己評価の関係



設問：

・ロールモデル数

=「東京大学に進学した先輩や、東京大学に在学する知り合い（話したことがあるひと）は周りにどれくらいいるか」（0人, 1人, 2-3人, 5人以上, 10人以上）

・自己評価

=「あなたが今、東大志望だと仮定した時、今後努力すれば東大に合格できると思うか」（五件法）

$F(4, 2104) = 15570, p < .001$

→周りにロールモデルが多いほど、自己評価が上がる

保護者からの期待のジェンダーギャップ



設問：

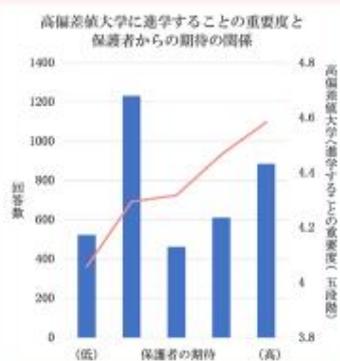
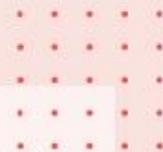
保護者からできるだけ偏差値の高い大学に行くことを期待されていると思うか

首都圏女子 vs 首都圏男子： $t(355) = 1.07, p = .29$

地方女子 vs 地方男子： $t(2788) = 2.30, p < .001$

→地方では、女子は男子に比べ、保護者から偏差値の高い大学へ行くことを期待されていると感じていない

保護者からの期待の内在化



設問：

「偏差値の高い大学に行くことは自分の目指す将来にとって有利だと思うか」(五件法)

「保護者からできるだけ偏差値の高い大学に行くことを期待されていると思うか」(五件法)

$F(4, 3711) = 18575, p < .001$

→高校生が偏差値の高い大学へ行くことを有利に感じるかどうかは、保護者に期待されるかどうかによって強く左右される

地方に残ることへの期待



設問：

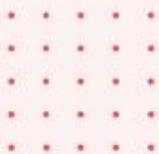
「保護者の方からできるだけ実家に近い大学に行くことを求められていると思うか」

地方女子 vs 地方男子： $t(2636) = 8.00, p < .001$

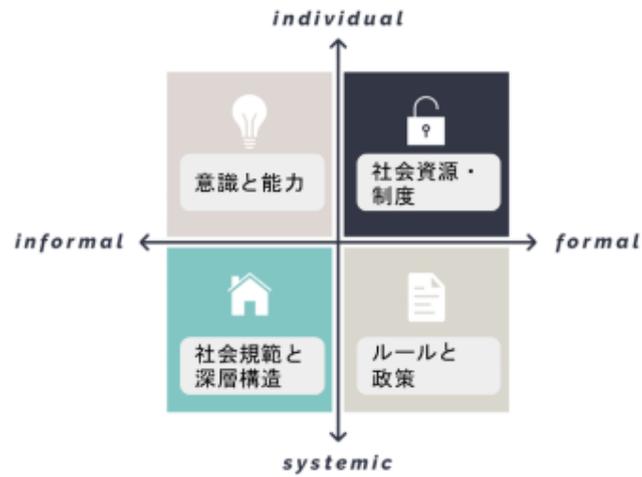
→地方では、女子学生の方が男子学生よりも地元に残ることを期待されている、と感じている

04. 団体の展望

調査事業の結果を踏まえて、
私たちが取り組んでいきたいこと



変化に向けたフレームワーク



①意識と能力

目的

地方の女子学生に長期的にロールモデルを提示し、自己評価の改善を行う。様々なキャリアの提示を通して、地方女子学生の職業選択の幅を広げる。

私たちが取り組むこと

1. メンタリングコミュニティ
 - a. 高校2年生～受験まで、東大女子学生が地方女子高校生のメンターとして伴走
2. キャリア講座
 - a. 地方にいると見えない職業選択肢の提示

②社会資源・制度

目的

大手塾がない・金銭的に通塾できないなどの問題を抱える地方女子学生に十分な教育機会を与える。難関大学に進学を希望する地方女子学生が金銭面や安全面の理由から進学を諦めることがないようにする。

私たちが取り組むこと

1. 企業との提携によるオンラインでの無償の授業提供
2. 大学・大手デベロッパーを巻き込んだ、安全安価な住居提供

③社会規範と深層構造

目的

地方女子の進学を阻む根本的な原因となるステレオタイプ・バイアスを明らかにして、難関大学に進学するポテンシャルのある地方女子学生の周辺のステイクホルダーに対して、そのようなステレオタイプを解消する

私たちが取り組むこと

1. 情報発信事業
2. 調査事業
 - a. どのようなジェンダースtereotypeが地方女子学生に影響を与えているのかを明らかにする
3. ステレオタイプ解消事業
 - a. そのステレオタイプを解消できるような新規取り組みを行う

④ルールと政策

目的

様々なステークホルダーが地方女子学生に対する課題に取り組める土壌を整備する

私たちが取り組むこと

1. 国の方針として「難関大の女子比率をあげる」ことを掲げさせる
 - a. 第6次男女共同参画基本計画・「女性版骨太の方針」数値目標に「難関大の女性比率」を入れる
2. その大目標下での様々な施策を提言する
 - a. 学生寮への女子学生受け入れのための補助金etc.?



#YourChoiceProject

Thanks

ご質問・ご依頼などは以下メールアドレスまで
yourchoiceproject2021@gmail.com

<https://yourchoiceproject.com/>

#YourChoiceProject マンスリーサポーター募集中！
月に1000円から、月額寄付を募集しています。
サポーターには毎月報告書を送付。
ぜひ応援していただけますと嬉しいです！



3 東京大学さつき会奨学金制度創設時の思い出

(1) さつき会奨学金創設 10 周年によせて——東京大学とジェンダー・ダイバーシティ——

江川雅子 元東京大学理事(2009-15 年)

2009 年、濱田純一総長就任時に初めての女性理事となった私にとって、ジェンダー・ダイバーシティの推進は常に大きな課題だった。小宮山総長時代の 2006 年に男女共同参画室が発足し、従来からあるものを含めて 4 キャンパスに 7 か所の保育所が設置されるなど、当時としては画期的な取り組みも行われた。だが、2009 年当時の女性教員比率は 10.3%で、教授に占める比率は 4.2%、准教授・講師は 10.3%、助教・助手は 15.8%と、上位層ほど女性が少なかった。女性事務職員は人数ではほぼ 4 割だったが、管理職に占める比率はごく僅かで、民間企業に比べて遅れているという印象を受けた。法人化後、有期雇用の教職員が増えて 1900 人弱となっていたが、その女性比率は 27.4%で、下位の職層や有期教職員に相対的に女性が多いことも気になった。

特に驚いたのが、学部の女子学生比率の推移である。私が入学した 1976 年には 6%ぐらいだったと思うが、1980 年代、90 年代に徐々に増え、2000 年頃に 2 割弱に達した。ところがその後ずっと伸び悩み、20%未滿が続いていた。この状況は最近まで続いており、入学者に占める女子学生比率が 20%を上回ったのは 2021 年のことである。2023 年度入試では 22.3%となった。因みに、この数字は後述の学校推薦型選抜と合わせた合格者に占める女子学生比率で、従来から行われている一般選抜入試における女子学生比率はやや低く、2023 年度は 21.8%だった。

入学者に占める女子学生比率は、志願者に占める女子学生比率とほぼ同じである。つまり、女子学生が増えないのは、東大を受験する女子学生が少ないのが大きな原因だ。そのことを朝日新聞の辻記者に話したところ、寄稿の機会をくださった。2013 年に私が寄稿した文章には「理科一類の女子比率 10%に対し、主に医学部に進む、より難関の理科三類は 18%あり、受験科目に数学や理科があることが理由ではなく、成績がよくても受験していない。実際、高校の先生に受験を勧められたのに家族に反対されたという女子東大生は多い」とある(『朝日新聞』2013 年 9 月 2 日、「私の視点」)。特に地方の女子高校生は、地元の大学の受験を勧められることが多いと言われている。

現在と異なり、当時は「女性活躍」が社会の重要な課題として位置付けられていなかったのも、「無意識のバイアス」などに対する認識もなかった。そのため、学内で議論すると、女性教員比率、女性職員管理職比率を引き上げるための取り組みに関しては、「実力主義を貫くべき」という慎重な意見が多かった(実際の教員人事では、実力のある女性教員が応募してくれない、声をかけても断られる、などの課題もあったと聞いている)。それに対して、女子学生比率の向上には賛同する声が多かった。学部の女子学生比率が高まれば、将来、大学院学生、教員に占める女性比率も向上するだろうという期待もあった。そこで、濱田総長の行動シナリオ(任

期 6 年間に取り組む施策と達成目標をまとめたもの)に、「2020 年までに学生の女性比率 30%の達成を目指す」という目標を掲げた。私は入試担当ではなかったが、大学説明会に積極的に参加したり、女子高校生やその保護者を対象とした説明会に登壇したりして、女子高学生の受験を呼びかけた。また、在学女子学生の帰省時に交通費の一部を大学が支援し、女子学生が母校を訪問して東大での体験を共有、受験を促してもらう母校訪問プログラムも開始した。

このような状況の中で、さつき会が女子学生を増やすために奨学金を設けたいと提案してくださったことはとてもありがたかった。地方の女子高校生が東大を目指すハードルを下げたいという大学の希望を伝えて検討を進めて頂いた。だが、当時、受験生が入試出願前に申請し、選考された者は入学後に手続きをとることで正式に採用が決定する、という奨学金は大学独自のものでは前例がなく、女子高校生にどのように制度を告知するか、給付申請の受付をどのように行うか、奨学金制度を継続するための寄付募集活動をどうするか、などの課題も多かった。また、さつき会関係者が奨学生の選考に関与する仕組みを整えるのも大変だった。2004年に東大が法人化され、渉外本部や渉外・基金課が発足してから数年後のことで経験値も少なかつた上に、教育・学生支援部奨学厚生課などの学内関係者・さつき会関係者との調整も大変だったと聞いている。この奨学金の立ち上げに関わった多くの教職員、卒業生の皆さまのご尽力に改めて深い敬意と感謝の念を表したい。授与式で受給学生の話を知ったときに、貴重な奨学金制度を創設してくださったことをありがたく思った。

当初、奨学金の受給者は 2-3 人だったが、その後順調に増え、寄付者の輪もさつき会を超えて大きく広がっていった。2 年前に奨学金の金額も月額3万円から5万円に増額されたと聞いている。10 年の歴史を通じて奨学金が充実し、多くの女子学生が支援を受けて東大に進学できたことを本当に嬉しく思う。

濱田総長の 6 年間には、他の理事も総がかりで女子学生比率を向上させるためにいろいろな取り組みを行った。例えば、理系の女子学生が卒業後のキャリアをイメージできるようにと、さまざまな分野で活躍する女性卒業生による講演会を、女子高校生・大学生を対象に開催した。大学紹介を目的とする AERA のムックはまるごと女子高校生向けとし、表紙には「東大へ行こう」というタイトルと 24 人の現役女子学生の写真を掲載した。白金寮が閉鎖された後、女子学生向けの寮の検討を進めると同時に、当座の対応として学外の宿舎を管理運営している会社との提携により女子寮を手配した。総長のリーダーシップで検討を開始した推薦入試制度は、2016 年度から導入された。この制度の目的は、総合的な学力を備えた多様な学生を受け入れることだが、女子学生比率向上に資するように、この制度に応募できるのは各校男女 1 名ずつとした(現在は、「学校推薦型選抜」と名称を改め、各校 4 人までの推薦ができ、男女各 3 人まで推薦ができるしくみになっている)。

このようにさまざまな取り組みを行ったにもかかわらず、6 年間女子学生比率は殆ど伸びず、退任時の 2015 年に 18%台にとどまっていたのは大きな心残りだった。退職金を頂いたので、それを生かして女子学生比率を向上させる一助にできないだろうかと思った。東大は理系学生

の比率が高いが、理系は修士まで進学するのが一般的になっている。そこで、女子学生の修士課程（2年間）をサポートする奨学金を設ければ、学部学生を支援するさつき会奨学金を補完できるし、女子高校生も大学院へ進学しやすくなって良いのではないかと考えた。渉外本部の上別府さんや渉外・基金課の手塚さんなどと相談しながら、「東京大学女子学生奨学金（大学院修士課程）」を設けて頂いた。理事退任後、私は一橋大学の教員としていくつかの授業を初めて担当し、その準備で追われていたこともあって、この奨学金についてさつき会の方に相談したり、他の女性の卒業生に呼び掛けたりということが殆どできなかった。だから、上別府さんが寄付者の方に呼び掛けてくれたり、経営協議会メンバーの岩田喜美枝さんが賛同して下さったりしたのはとてもありがたかった。また、他の経営協議会の女性メンバー（翁百合さん、小林いずみさん）にも寄付して頂いて、受給者の学生と一緒にランチを食べながら将来の夢の話聞いたのは印象に残っている。だが、問題意識を他の卒業生と共有し、支援の輪を広げることができなかったことを残念に思っている。

東大の女子学生が編集している「biscUiT」というフリーペーパー（2011年4月に創刊）がある。その最新号（Vol.25, 2023年4月）に掲載された「女子率とどう向き合うか。4団体合同座談会」の内容が興味深い。東大志望の女子学生が少ない理由として、身近に東大に進学した女性のロールモデルがないことや、メディアの影響で「東大＝雲の上の存在」というイメージが定着してしまっていること、学力に関係なく、社会的要因によって自己効力感の低い女子学生が多いことを指摘している。また、アンケート調査では「親から、女子が浪人するのはダメだと言われている」「女子より男子の方が頭がいいのだから、東大に女子が少ないのは仕方がない」という回答があったそうだ。

東大のキャンパスに女子学生が少ないことはマイノリティが不利だという問題にとどまらない。偏った環境で4年間過ごすことが男子学生に与える影響も看過できない。実際、交換留学制度で東大に来ることが決まった米国大学の女子学生の親が「このような環境に娘を送り出すのは不安だ」と言い出して、問題になったこともあった。また、リーダー人材の育成を担う教育機関として、日本社会の多様性を高めるためにも女性の卒業生を増やしていく責任もある。

多様性は優れた学問・研究に不可欠であり、歴代の総長が力を入れてきた。五神前総長は2017年度に自宅からの通学が困難な女子学生を対象とした家賃支援制度（女子学生向けの住まい支援）を導入、藤井総長は2027年度までに女性の教授と准教授、合わせておよそ300人を新たに採用する計画を発表するなど、それぞれジェンダー・ダイバーシティの推進に取り組んでいる。東大の女子学生比率が早期に海外の大学と肩を並べる水準に向上し、教員や職員を含めてジェンダー・ダイバーシティが更に進むことを願ってやまない。

(2) さつき会奨学金の思い出

杉山健一（元渉外本部長）

さつき会奨学金基金の10周年、誠におめでとうございます。

さつき会が女子学生のための奨学金基金を検討しているとの報告は、その当時渉外本部長を仰せつかっていた私にとってとても嬉しいものだった。全国規模で地方出身の女子学生を支援する奨学金は初めての企画であった。

当時は（今もだが）東京大学は学部入学生の女子比率20%を超えることを目標としており在学女子学生を母校に派遣したり、役員が地方に出向いて女子高校生に受験を呼び掛けるなどの活動を展開していた。だが残念ながら20%を上回ることは少なかった。

さつき会が2011年に創立50周年を迎えたのを機に奨学金を創設し、経済的な理由から東大受験を断念している地方の優秀な女子学生を支援しようと計画した。この基金創設は、さつき会の経験と英知を次世代に伝えるための活動の一つとして総会で決議されたもので、さつき会の意気込みの高さを感じさせるプロジェクトであった。

東京大学基金に対し、2012年3月に特定基金登録申請書が提出され、会員へのダイレクトメール送付や、会員および会員以外の個人・企業への呼び掛けを行うなど準備活動を行って基金はスタートした。

その年の9月、さつき会の一会員の方から1,000万円のご寄附があり、この奨学金に弾みがついたと渉外本部一同大いに喜んだことを記憶している。

さらにお孫さんの東大入学を機に東京大学への支援を始められた篤志家の方から「東京大学の女子学生が将来、日本さらには世界で活躍して欲しい」との願いからさつき会奨学金へのご寄附に注力され、継続してご支援頂いていることもこの奨学金が確かな活動を維持できている要因と思う。

多くの方々からのご支援を得て、累計寄附金額が6億円になろうとしていると聞く、素晴らしい成果と敬意を表したい。

東京大学の女子学生比率30%の目標達成に向けて「さつき会奨学金」の役割に大いに期待したい。さつき会のみなさまのご努力、ご尽力に心から感謝申し上げます。

さつき会の益々のご発展を祈念しております。

(3) さつき会奨学金の思い出

東京大学職員 市川賀一

私はさつき会奨学金の創設時に本部奨学厚生課に在職し、奨学金の事務担当として携わりました。

当初、さつき会奨学金は東日本大震災で被災した女子学生を対象とした一時金としてスタートしました。被災された3名の女子学生を採用し、一時金を支給しました。採用された学生3名を招待して、さつき会幹事及び大学関係者により授与式及び懇親会が開催されました。被災という大きな不幸に見舞われながらも、懇親会での女子学生たちの嬉しそうな表情が忘れられません。

その後、さつき会から、一過性の制度ではなく、東京大学に進学を志望する女子学生を対象とした継続的な奨学制度を創設したいとの要望がありました。それまで企業からの寄付金による奨学制度はありましたが、卒業生を中心とした寄付金や女子学生向けの奨学制度はありませんでした。他の国立大学でもこうした奨学制度は皆無でした。私も初めてのケースに戸惑いながらも、寄付金を担当している東大職員やさつき会の担当者の方々と協力しながら、さつき会奨学金の創設に向けて尽力しました。

さつき会の担当者の方々からは、経済的な理由で東京大学への入学を断念している女子学生を応援したいとの強い意向でした。その意向は女子の入学者が2割にも満たなかったため、女子の入学者をもっと増やしたいという大学の方針とも一致していました。

設立当初は数年程度しか奨学制度を運営できるほどしか寄付金が集まりませんでした。しかし、その後年々、寄付金額が増え、それに応じて、奨学金月額を増額、採用数の増員、対象者を学部生だけでなく大学院学生へ拡大と、設立当初と比較できないほど充実した奨学制度となりました。これもひとえにさつき会の方々の地道な広報活動等の成果であると感謝しています。

今後もさつき会奨学金がより一層充実し、本奨学金を受給した卒業生たちが将来あらゆる分野で世界的に活躍していくことを期待しています。

(4) さつき会奨学金の思い出

東京大学職員 黒野優菜

私はさつき会奨学金の設立の当時、渉外本部という、大学基金への寄付依頼を行う部署で職員として勤務しておりました。今回は就職した当時の、学生課で学生に直に対応した経験も踏まえて、さつき会奨学金に関する思い出について記述させていただきたいと思います。

私は 2007 年に文学部を卒業し、その後職員として就職をしました。大学に就職を希望した動機の一つに、「奨学制度に関わりたい」という思いがありました。私自身、経済的に豊かではない家庭環境から、奨学金を借りて進学したという経緯があったためです。進学で環境が一変した経験から、「自分と同じような環境の学生の支援をすることができれば」と、当時は漠然と考えておりました。

■ 経済的支援を求めて列に並ぶ学生たち

就職当初は奨学厚生課の配属になりました。ここは主に授業料免除申請や、日本学生支援機構などの奨学金の申請受付を行う所です。当時、申請の締切日となると、安田講堂の外にまで、書類を持った学生の行列が続いていました。私自身、経済的支援を必要とする学生がそれほど多くいることに驚きました。また、奨学制度の多くは貸与型で、卒業後も十年以上かけて返済が続くことから、学生から「奨学金は借りたいけど、借金を背負うようなもの」という言葉を聞くこともあり、給付型の奨学金が需要に対して少なすぎることも実感しました。

その後は大学院の教務系の窓口を経て、2011 年に東京大学の基金を扱う渉外本部に異動となりました。

配属となつてすぐに、先輩職員から「被災した女子学生へ寄附して下さったさつき会の方々から、継続的な奨学金を作りたいというお話を頂いている」と聞き、その後私が担当させていただくことになりました。内心、「まさか本当に、自分が奨学制度に関わることになるなんて」と自分の希望が叶ったことに驚きました。

■ 「返済不要の、女子学生のための奨学金」

それから、奨学制度の具体的な計画を伺いました。

まず、返済不要の給付型であり、対象者も自宅外通学せざるを得ない女子学生としているということにとっても感激しました。性別や通学条件などを指定して、支援の対象を具体的に想定して下さっていることに、発案者のOGの方々の思いやりを強く感じました。「こういう奨学金がもっと増えればいいのに」と考えたのですが、寄付募集を実際に担当するのが自分であることから、「自分が渉外活動を頑張って、規模を大きくしてより学生を多く支援してもらえるようにしよう」

と思うようになりました。

■手探りでの渉外活動

それから渉外活動を始めました。社会で活躍されている卒業生の方々に面会の依頼をし、東京大学基金の説明をし、寄附金を用いたプロジェクトの一つとして「さつき会奨学金」の説明、ご協力をお願いするのですが、最初はアポイントメントを頂くのにも苦戦する日々が続きました。

それ以前は教務課の窓口において、時間割を作ったりシラバスの情報を入力したりしていたのですが、急に電話をかけての「アポ取り」のような活動をする事となり、全く分野の異なる業務内業に初めは戸惑うばかりでした。また、学生募集の時期が決まっていたことから、「もし自分の渉外活動が上手くいかないために、目標金額に到達しなかったら」などと自問自答して悩むこともありました。

ただ、日頃の渉外活動でも上手くいかないことや困難なことはあるのですが、「さつき会奨学金」を担当するようになってからは、それまでの渉外活動が異なるものを感じられました。

実際、面会させていただくOGの方からは、渉外活動に限らず、いち後輩として、アドバイスやエールを頂けることです。OGの方々は訪問した私を温かく迎えて下さり、私の業務内容だけでなく、現在の大学の様子や最近の学生の事にも耳を傾けて下さいました。

「もし困難な壁にぶつかったとしても、何かしらは選び取ってやっているもの。いつか自分が意識せずに取り組んでいたことが、大きく実を結ぶ時が来るから、頑張るって」

先輩方に、そのような言葉をかけていただき、渉外活動という枠を超えて、自分の励みとなったことを覚えています。

■実際の学生の声を聞いて

このように、社会で活躍される先輩方にお会いするうちに、同時に「学生のこともっとよく知らなければ」という思いも強くなりました。実際に、地方出身の学生はどのような思いで東京大学を目指したのか、また何が進学を阻んでいるのかという、奨学制度が必要となる背景をより深く知りたいと考えるようになりました。

実際に、学生団体などに参加している女子学生から話を聞くこともありました。やはり地方出身の学生の中には、「両親には地元の国立大学への進学を勧められた」という学生もいました。当時、東京大学の学部学生の女性比率は二割を切っており、増加傾向にすらなく十年以上同程度の水準が続いていました。データでは女子学生の進学には、偏差値よりも両親の意向や立地などがより強く影響することは知っていたのですが、実際に学生に話を聞くと、「あえて東大に行かなくていいと言われた」という学生がまだまだいることに驚きました。

「それではどうして東大を希望したの?」と聞くと、「やっぱり挑戦してみたかったから」と笑顔で答える学生を見て、「女子学生には、特に『女子学生の挑戦を応援している』というメッセージ

のある制度が必要なのだ」と思いました。生き生きと自分の夢を語り、自分は自分が作った団体の活動で、周囲の学生をエンパワメントしたい、と語る学生の表情を見て、自分も頑張らなくては、という思いを強くしたものでした。

■いよいよ目標達成へ

渉外活動で少しずつ寄附金額が増えてきたものの、中々目標に到達しないという時期に、焦っている私を見て、他の職員から「今どれくらい集まっている?」「あとどれくらいでスタートできるの?」と声を掛けられることが増えました。

それまでは私が単独で渉外活動を行っていたのですが、「あとこのくらいで達成できます」「まずは奨学生三名への支給を目標にしていって……」などと状況を報告していると、「じゃあ自分も応援するよ」と自ら寄附をしてくれた職員もいました。また「今度OGに会うから、この奨学金のことも紹介したいと思う。パンフレットを分けてほしい」などと声をかけられることも増えました。

数か月の渉外活動の間に、「さつき会奨学金」はOGの方々だけでなく、東京大学を目指す女子学生を応援したい、女性の活躍を応援したいという方々から、大口の寄附を頂けるプロジェクトにまで発展していました。担当をしていたと言っても、とても私一人では規定の目標を達成することは出来ませんでした。このプロジェクトを通じて、これからの社会を担う女子学生の挑戦を応援したい、という方々が沢山いらっしゃることを実感することができました。

■第一期生の奨学生を迎えて

沢山の方々のご寄附をいただき、とうとう期限までに目標の金額を達成することができました。最初の奨学生は三名の学生で、いずれも出身校で一名の枠で推薦を受けて、入試にも合格した意欲ある優秀な学生たちでした。

最初に一期生を迎えて奨学金の授与式を行うことになった時、私も事務職員として参加したのですが、少し緊張した表情の女子学生たちに出会うと、これまでの不安や辛さが吹き飛び、「本当にこのプロジェクトに関わってよかった」という思いが胸に溢れました。最後に、ご寄附いただいた方々への報告のために、授与式の様子をニュースレターにまとめている時にも、それまで渉外活動で出会い、学生を応援するためなら支援したいと言って下さり、また私個人にも頑張るようにとエールを下さった方々のお言葉が浮かびました。就職した当時の漠然とした「奨学制度に関わりたい」という思いが、このように実現するとは思っておらず、大変有難いご縁と機会を頂いたことに、感謝の思いで胸がいっぱいになりました。

その後、私は渉外本部に三年九か月ほど在籍した後、異動となりました。初期の短い期間ではありましたが、第二期生を迎えるまで渉外活動を担当させていただきました。第二期生の授与式では、かつて初々しい表情で参加していた第一期生が、すっかり「東大の先輩」になってい

るのを見て、頼もしさを感じたものでした。「さつき会奨学金」が単なる経済的支援に留まらず、女子学生同士の連帯の一助となっていることも素晴らしいと思いました。その後も奨学生たちの中で、良い繋がりが続いてくれていたら良いなと思います。

異動後、私自身は直接渉外活動には関わっていないのですが、その後も有難いことに多額の寄附が集まり、大学院生の支援も対象とするなど、さらに規模を拡張した上で現在まで続いていると聞いています。当初はこれほどの規模になるとは想像もつかなかったのですが、「さつき会奨学金」が、OGの方々の思いやりから生まれた画期的な学生支援プロジェクトとして、今後も長きに渡って大学に存続していくことを、職員の一人として心から願っています。

(5) さつき会奨学生の選考方法についての試み

75年経 菊地敦子

1 さつき会奨学金との出会い

2012年1月に37年勤務した人事院を退職しました。自分の職業人生の記念に何か寄付をしたいと考えておりましたところ、さつき会奨学金のお話を聞き、目的・趣旨に共鳴し、なんと良いタイミングかと喜び、退職金の一部を寄付することにしました。

私たちの若いころに比べると女性の社会参加は増加しましたが、一方で、社会の中核として活躍する女性の割合は、遅々として増えません。在職中に取り組んだ女性国家公務員の採用は拡大してきましたが、管理職・幹部職への登用割合の歩みは遅く、主要諸外国との差は開く一方です。

地方出身の女子学生の東京大学進学の後押しができる、さつき会奨学金構想は、本当に実現させたいという思いでした。受験する段階で奨学金が出るのが分かること、当時は多くなかった給付型であったことも評価できました。当初、毎年3人を10年間支援できるようにと目標を掲げていましたが、女性のみを、かつ東大進学者だけを対象にしているということで、どこまで支援者が増えるか心配しつつも、奨学金委員会のメンバーは意気軒昂でした。

さつき会奨学金委員会からのお誘いをいただき、私も奨学生の選考方法の提案に参加させていただくことになりました。

2 選考委員会での協議

当初、大学事務局からは、家計基準（日本学生支援機構第1種奨学金の基準の準用）により困窮度の高い順に番号をつけて、奨学生候補者を選考するのが一般的な方法だと説明されました。

しかし、さつき会奨学金は、地方から上京し、自分自身の夢や志を実現すべく東京大学に進学し、社会的な活躍をしていく女子学生を応援したいという目的があり、それにふさわしい奨学生を選考したいということで、家計基準に加えて、提出された課題作文について評価を行うこととし、選考基準にその方法を明記することを提案しました。

作文の評価方法についての課題としては、さつき会として、どのような奨学生を期待するのか、より明確にして、選考に当たってどのように評価するのかを、募集段階から明確にしておく必要があるのではないか。作文は本人以外の手が入る可能性もあり、内容を重視することには危険性もある。作文の評価方法に関し、奨学生の選考方法の公平性が問われたときに大丈夫か。などが挙げられました。

限られた字数の作文の中からではあるが、①本人の志や目的意識が明確であること、②社会的な問題意識、活動経験などを通して、今後の活躍・展開が期待できること③自分自身で物事をよく考え、行動に移し、事態を打開して行く経験をしていることなどの評価視点を示し、単に思いや決意を作文しているだけでなく、具体的にいつ、何をどうした、それはなぜそうした

か、どうやって行動したかがよく分かり、心を打つ内容になっている作文を評価することとしました。

選考基準の公平性については、①あらかじめ定めた選考規程、選考基準、判定方法等により公正な手続きで選考をする。②作文の課題、評価観点、評価方法に基づき、複数の選考委員が、個人情報を伏せた番号のみの作文答案で採点を行う。③選考委員の合計得点で評価され、経済的評価点をも加味した規程の判定方法により、裁量の余地なく奨学生（候補者）が決定される。これらの基準や手続きを明確にし、関係者に、さつき会奨学金のねらいや、作文の課題設定、評価の視点などを説明していくことで理解を求めることとしました。

第1期生の選考は、大学側の事前の了解を個別に取り付けつつ、選考プロセスを準備して、選考委員会での議論で決定をしていただきました。それを選考方法として定着させるために、さつき会のメンバーは議事録の作成を促したり、選考基準を作成したり、粘り強く大学関係者とやりとりを続けました。

当時のこの新しい試みは、選考委員会の先生方のご理解や多忙の中での事務局のご協力なくしては実現しなかったと改めて感謝申し上げます。

3 さつき会奨学生との交流

さつき会奨学生とは、奨学金の授与式や折々のさつき会活動でお会いすることができ、若い世代の夢や希望やエネルギーを受け取ることができたのは、幸せな経験でした。

親子以上に年の離れた先輩たちの質問に、素直に明るく打ち返してくださる奨学生たちを見ていると、思わず応援したくなります。初期の奨学生たちには、様々な形でさつき会奨学生の立場からの発言やコメントを求めることが多く、負担をかけることに申し訳ない思いもしていましたが、いつも協力的に対応して下さったこと、感謝申し上げます。さつき会奨学金の意義を理解してもらい、その基盤を確実なものにすることにつながったと思います。

さつき会奨学生たちが、この奨学金を受けたことを誇りに思って、大きな世界に羽ばたいてくださることを願ってやみません。

(6) さつき奨学金制度創設時の思い出

幹事 永沢 裕美子(84年育卒)

「さつき会奨学金」が創設され、第1期奨学生3名の誕生から、今年で10年になります。創設当時の2011年から2013年にかけて代表幹事を務めていたことから、手元に残っていた記録や記憶を頼りに、同奨学金の先駆けとなった「東日本大震災被災者特別援助奨学金」から、受験生対象予約型の「さつき会奨学金」の発足、1期生誕生までの歩みを振り返ってみたいと思います。

1. 「東日本大震災被災者特別援助奨学金」

現在の「さつき会奨学金」には前史があります。2011年9月に、東日本大震災によって実家が被災した女子学生を対象に行った一時金給付支援です。震災の余震がまだ続いていた4月の幹事会で支援が起案され、5月には東京大学に出向いて趣旨説明を行って協力を取り付け、会員から寄付を集め、9月には3名の女子学生に給付を実施するという、実にスピード感と一体感のある対応をすることができました。この経験が、「さつき会奨学金」の創設という、それ以前では考えつかなかった大きなチャレンジに向かって進む原動力になったと、当時のことを思い出し、感慨深く思います。

<2011年秋にホームページに掲載した記事>

★「東日本大震災被災者特別援助奨学金」授与式を行いました。

9月28日、東京大学本部において、3名の女子学生（学部2年生、修士課程2年生、博士課程1年生）に、奨学一時金として金15万円を授与いたしました。

この奨学金については、会員の皆様には先日お届けした会報にて報告させていただいておりますが、3月11日の大震災の被災状況が伝えられる中で、「さつき会として何かできないものか」という声が会員から寄せられ、これに賛同する声の広がったことから、幹事会で立案、7月の総会において満場一致の承認をいただき、発足したものです。さつき会としては初めての取組みでしたが、江川雅子理事を始め多くの東大職員の方々のご協力をいただき、実現に至りました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

対象学生からは、「被災して暗い気持ちになっていたところに、先輩から思いがけず支援をいただき、心強く思った」、「被災した両親を思うと、大学院での研究を続けていいのか迷っていたが、奨学金をいただくことができ、研究を続ける決意がついた」といった感謝の言葉がありました。家族の被災という辛い経験の中にもありながらも、将来の目標をしっかりと見据え勉学に励む3名の女子学生に出会うことができたことは、先輩として喜びであり誇らしく思えた瞬間でもありました。

奨学金準備委員会

2. 「さつき会奨学金」の創設に向けて

(1) 一時金給付から給付型奨学金の設立へ

被災学生の支援に向けて動く中で、私たちは、地方から子女を東京の大学に進学させる家庭の負担がいかに大きいかを再認識することになりました。そして、こうした経済的負担の大きさが、東京大学の女子学生比率が上がってこない一因ではないかと考えるようになり、給付型奨学金の創設が俎上に上がることになりました。

幹事会では、当然、次の2点を懸念するご意見がありました。一つは、一時金給付と違って、給付型奨学金の場合、学生が在学期間中に安心して学べるよう、確実に給付責任を果たさなくてはならないところ、私たちがそのような大きな責任を果たせるのだろうか？ということ。もう一つは、様々な諸事務をさつき会のような組織でできるのだろうか？ということでした。

最初の課題は、平時であれば、慎重な議論に終始して夢物語に終わっていたかもしれませんが、この時は、日本が東日本大震災という大惨事を経験した直後でしたし、何よりも、一時金給付の実現に向けて一致団結して動けたことが大きな自信ともなっていました。また、東京大学の職員の方々が、私たちの思いに添えて好意的に動いてくださり、必要な情報や助言をくださったことも大きかったと思います。

第2の課題については、さつき会は法人格を持たない団体であることから、寄付金を集め管理することには限界があります。そこで、東京大学の奨学制度の一つとして発足し、寄付金集めは東大基金を使うということを決定しました。寄付金の15%が管理費として差引かれ、寄付に回るのは85%ということになりますが、東大基金を通じた寄付は寄附金控除の対象となることから、この選択以外にはなかったと思います。

こうして、給付型の奨学金の創設に向けて奨学金準備委員会が設置され、一時給付金を担当していたチーム(堀井紀壬子さん、清水道子さん、大里真里子さん、筑本知子さん、私)に降旗千恵さんが参加くださり、本格始動することになりました。秋の夜、銀座のタワーマンションにあった堀井さんのご自宅に集まり、ああでもない、こうでもない遅くまで意見を交わしたことが、あの時、目の前に広がっていた東京の夜景とともに、懐かしく思い出されます。

(2) 準備委員会での議論と当初概要

奨学金準備委員会では、奨学金の目的から始まり、どういう学生を支援するのか、月額いくらが妥当か(可能か)、いくら集めると何人の支援をすることができるか、寄付金集めの方法等を一つ一つ検討していきました。

目的については、東大の女子学生比率を高めることを最優先課題に据えることとし、地方の高校生が安心して東大受験に臨めるように、センター試験の前に、東大合格を条件として受給資格を付与する「予約型」とすること、選考にあたっては、成績だけでなく大学進学に対する本人の志や行動意欲・目標等も重視したいということで、さつき会が提示した課題で作文を書いて出してもらうことを決めました。

給付額については、できるかぎり多くの学生を支援したいという思いもあり、アルバイト1件分

の金額を支援しようということで、月額3万円に落ち着きました。そして、毎年若干名の学生を支援できる資金(目標額1700万円~2550万円)をできる限り早期に確保し、寄付の状況や奨学金給付の効果等を評価し、5年後に見直しをすることを決めました。

こうして、2012年6月24日に開催された第52回定時総会に、さつき会50周年記念事業として「思いをつなぐ『さつき会奨学金』制度の設立(案)」と題する議案を提出し、満場一致で承認いただき、「さつき会奨学金」が創設されました。

(3) 創設当時の裏話

ここまで読まれた方は、「さつき会奨学金」は、さつき会の意気込みと東京大学の支援のもとで、順風満帆なスタートを切ったと思われるかもしれませんが。確かに、振り返ると、多くの思いがけないご支援に恵まれることになりましたが、当初、東京大学は、職員の方々や女子学生比率を高めるために尽力されていたOGの江川雅子理事を除くと、今ほどには協力的ではありませんでした。東大の管理棟を訪ね、卒業生に「さつき会奨学金」のご案内をしていただきたいとお願いしたところ、某男性理事からつれないお言葉をいただいていたことを、今でも思い出します。詳しく書くことは控えますが、今思えば、東大卒の男性の財布の紐は堅いということをおっしゃりたかったのだらうと思います。しかし、その言葉に私たちは大いに奮起しました。さつき会を中心にOGの方々に寄付のお願いに回り、多くのご支援をいただくことができました。あの一言に接していなければ、早期に目標額を超える寄付金(2013年2月時点で約2700万円)を集めることはできなかつたかもしれません。

(4) 創設時にお世話になった方々

「さつき会奨学金」の立ち上げにあたっては、東大の職員の方々には本当にお世話になりました。奨学厚生課の職員であった市川賀一さんには、他の奨学金がどうなっているのか等を丁寧に教えていただいた他、奨学生の選考、学生への通知、授与式等、初めてのことに尽くしたので、色々とお助けいただきました。余談ですが、市川さんを訪ねた時に、授業料免除の申請窓口の前にラウンジがあり、そこで、男子学生が昼食を摂っていたのですが、白いご飯だけの弁当でした。裕福な家庭の子女が多いと言われる東京大学にも苦学している学生がいるので、月額3万円でも大きな支援になると市川さんから教えていただいたことで、3万円という金額についての迷いを吹っ切ることができました。

東大の渉外・基金課の職員の方々にも大変お世話になりました。当時、さつき会会員でもある東大職員の黒野優菜さん(07年文卒)が、東大基金の「さつき会奨学金」担当となってくださっていたことは、大きな力となりました。

「さつき会奨学金」の存在が東京大学に一目置かれるようになったのは、(公財)山口育英奨学金 <https://yamaguchi-esf.or.jp/purpose/> から高額のご寄付をいただいたことがきっかけとなりました。渉外本部で同財団を担当されていた、慶応OGの下田浩美さんが、数多ある事業の中から「さつき会奨学金」を理事長の山口敬太郎様に紹介くださり、同財団の設

立趣旨（優秀な才能を持ちながら経済的理由で修学困難な学生に学資を貸与して、有為な人材を育成すること）とも合致したことから、「さつき会奨学金」の創設を支援くださることになったという経緯でした。同財団からご支援をいただいたという話を東大 OB の方々にいたしますと、それはすごいねと言われ、得意な気持ちになったものでした。

そして、東大 OB の上別府潔さん。島村昭治郎様のご担当で、「さつき会奨学金」をご紹介いただいたおかげで、2017 年で一旦終わりかとも考えていた奨学金制度の継続が可能となり、選考時に人数を気にしなくてもよくなり、さらに、受験時に「さつき会奨学金」の存在を知らなかった学生も支援できるようになりました。

東大職員以外としては、東京銀杏会をはじめとする全国の地域同窓会からも数多くのエールをいただきました。ホームカミングデイの前日に開催された東京大学地域同窓会連合会全国大会にて、さつき会の代表幹事として「さつき会奨学金」の創設についてお話しする機会をいただいた際に、地方の地域同窓会の代表の方々から、それは素晴らしいことをしている、頑張れ!と声をかけていただきました。東大 OB は冷たいと思っていたところ、そうでもないんだ!と嬉しくなり、その勢いで東京銀杏会に入会、以来、二足の草鞋を履いています。

(5) 奨学生候補者の選考

資金集めとは別の、もう一つの大きな課題が奨学生（正確には奨学生採用候補者）の募集と選考でした。奨学生の募集にあたり、10 月に東大から各地方の高校に奨学金制度のお知らせを送付していただきました。応募の締切りは 11 月上旬。センター試験も終わっていない段階で、どれだけの応募があるのか不安に思いながら選考委員会に臨んだことを思い出します。初年度は 36 名の応募がありました。

奨学生の候補者の選考にあたっては、人事院で人材局長を務められた菊地敦子さんに参画をお願いしました。選考委員会は、御用納めを翌日に控えた 12 月 27 日に、本郷の学生支援センターの会議室にて開催されました。大学の奨学部先生 2 名、教育・学生支援部長、さつき会からは菊地さんと私が出席しました。選考過程についてはお伝えすることはできませんが、東大の合格発表があつてからは、東大からの連絡を首を長くして待ち、市川さんから、候補者の中から 3 名が合格して入学手続きをしたとの連絡を受けた時には、「合格してくれて、ありがとう!」と思わず叫んでいました。

4 月以降、初年度の選考を踏まえて、菊地さんに、選考基準の策定をお願いいたしました。作文から本人の志や意欲等を測ることは、本当に難しいことと思いましたが、考え方や着目点等を明文化していただいたことで、選考委員の精神的負担の軽減とともに、東大からも信頼を得ることができたと思います。

書き出すと、止まらなくなりますね。紙幅の関係で、私からの報告は以上とさせていただきますが、最後に、「さつき会奨学金」の創設という大きなチャレンジと一緒に臨んでくださった、さつき会の会員のみなさまにお礼を申し上げるとともに、地方出身者として、地方の高校から東

大を目指す生徒が増えることを願ってやみません。

(7) 次世代を担う優秀な女子学生の背中を押す

さつき会奨学金委員会委員長 大里真理子(1986 文)

さつき会が奨学金制度を設立する過程で、超えなければいけないハードルはいくつもあった。しかし、「次世代を担う優秀な女子学生の『背中』を押す」という理念が、私たち奨学金(準備)委員会並びにさつき会の「背中」も押すキーワードとなり、実現に至ったことは感慨深く、またその志が正しかったことを証明している。

そもそもさつき会は創成期から、学生に目が向いている団体であった。今も綿々と続く就職ガイダンスはその最たるものだろう。昔から、雑談レベルでは奨学金制度の話は出ていたが、具体的に書面にて起案されたのは、堀井紀壬子さん(1969 経)が委員長をしていた45周年事業委員会からだったと記憶している。ずっとゆるやかに増えていた女子学生の数が、2000年頃から20%の手前で頭打ちになってしまっていたことに危機感を感じてのことである。しかしながら、当時の私には、ボランティアで成り立つさつき会がそれを実現するのは夢物語のように思われ、また最初の一步の踏み出し方もわからなかった。

その直後の2011年、奨学金準備委員会が設立され、それまではまだ他人事のような感があつた私が縁あつて委員長となり、急激なスピードで実現に向けて動き出すのだが、まさにそれは「天の時、地の利、人の和」であると感じた。

さつき会は、女子学生・働く女性への理解や支援があまりにも足りていないことを改善すべくできた自助組織のような同窓会組織であったが、正直、東大との連携はあまり上手ではなかった。しかしながら、さつき会会員でもある江川雅子さん(1980 養)が当時、東大の理事をなさっていたという系口から、東大という組織を巻き込むということに成功した。東大自身が、ジェンダーダイバーシティの観点から、女子学生を増やそうとしていた気流にのることができたのは大きかった。ボランティア団体のさつき会単独では、原資を集め、奨学金制度を運用することは到底できなかつたであろう。また、世間もジェンダーダイバーシティの問題を解決する重要性を感じていたからこそ、東大やさつき会の呼びかけで、これだけ多大な寄付が集まったのであろう。そして東日本大震災という未曾有の危機が、物事をスピーディに進めることの重要性を東大にも私たちにも植え付け、奨学金制度をタイムリーに実現させた。

「次世代を担う優秀な女子学生の背中を押す」というさつき会の思いを実現させるために、普通の奨学金制度にはあまり見られないユニークな制度を導入することができたことは大変喜ばしいことであつた。3つの特長を紹介するとともに、私達のこだわりを理解し、前例がないにもかかわらず叶えてくださった東大には、心より感謝を申し上げたい。

1つ目は、地方在住者向けの高校予約型であること。

東大の女子学生を増やすためには、合格率が男性と同じくらいだから、受験する女子学生を増やさなければいけない。都心の進学校の東大受験者はある程度確保されているので、地方にいる優秀な女性がターゲットであると定めた。それは、当時の東大の男女共同参画室が公表している定量的データを清水道子さん(1968 文)が分析し、いまだ地方には封建的な価値観が残っているのだという学生からのヒアリングを元に思い至った結論であった。しかしながら、既に入學した女子学生に奨学金を付与しても、人道的には意義があるが、地方在住の女子学生が東大を受験することの背中を押すことにつながらない。「東大に合格したら奨学金がもらえるのだ」と「安心して」東大を受験してもらう必要がある、と考えた私たちは、この奨学金の支給の有無を東大受験前に決定することはどうしても譲れなかった(私たちはこの制度を高校予約型と呼んだ)。奨学生の1期生の一人から、「さつき会奨学金制度に受かったから、東大を受けたいと親を説得できた」という話を聞いたときは、この高校予約型の制度が機能し、私たちが背中を押すことが出来たのだと嬉しかった。

2つ目は、エッセイを受験生に課し、審査の対象に入れたこと。

初年度はたった3名ほどしか授与者を出せないだろうと考えた私たちは、背中を押さされている早く遠くへ飛び立ってくれそうな女子学生から支援をしようと考えた。さつき会奨学金に協力してくださった方々へ寄付して良かったと心から思っていたが、さつき会奨学金制度そのものが発展し、そしてよりよい社会に変革していく上での一翼を担ってもらうには、女子学生のポテンシャルを測る何らかの指標、具体的には志望動機等テーマに沿ったエッセイの審査が必要と考えた。

ただ、この件に関しては少々東大と意見が別れてしまった。東大はエッセイで測る実力と受験に受かる能力が別物であった場合を危惧し、加えて審査の公平性も不安視し、経済的基準のみで優先順位をつけることを主張した。

一方私たちは、自分の得た知識や経験を使って、自分の主張を相手に理解し・共感してもらう、このスキルはリーダーシップの重要な要素のひとつと考え、譲りたくなかった。そしてこのスキルが高い女子学生の成績が悪いはずがないと信じた。アメリカの大学の入試のほとんどがエッセイを重要視しているのだから、この指標には意義があり、評価も可能と考えたのだ。

さつき会奨学金に応募するという事は、受験勉強の忙しい時期に、エッセイのテーマをきっかけに自分自身とも向き合うことだ。応募してくださったすべての女子学生のその真摯な姿勢に心から敬意を表したい。

結局、東大が私たちの希望を叶えてくださった。菊地敦子さん(1975 経)が人事の知見を活かして、着地点を見つけてくださったことも大きかった。そして、心配した1回目の審査では、

選考委員の意見が大きく割れることはなく、またエッセイの評価が高い学生が受験に合格し、東大も私達もみな胸をなでおろした。

3つ目は、年に1回面談を行うこと、奨学生のネットワークを作ること。

次世代を担う女子学生が社会で活躍するよう背中を押すにはどうしたらいいのか？その一つの方法が定期的な面談であった。自分のしたこと・考えていることを年に1回は振り返り、これから何をすべきか・したいのかと考える機会を与える、そして、それを奨学生同士で分かち合い、仲間を作る。筑本知子さん（1988 工）の奨学生としての実体験を聞いて、奨学金準備委員会はすぐさまそのアイデアにとびついた。そして、東大卒業後はさつきスカラーという称号を与え、卒業後も彼らのネットワークとなるような場を設定する努力をした。

毎年秋に行っている奨学生との面談だが、奨学生の人数も増え、面談を設定する私たちの負荷も格段に増えた。しかし、奨学生同士が刺激し合ってもらうための面談だったものが、実は私たち奨学金委員会が何よりもエネルギーをもらえている、ということをぜひお伝えしたい。こんな思慮深く行動を起こしている女子学生たちが社会に飛び立ったら、どんなに日本国が良くなることか、と日本の未来が輝かしく思えるのである。また女子中高生に東大に興味を持っていただけのようなイベントを開くなど、私たちが課題視しているジェンダーダイバーシティ問題に自ら行動を起こして積極的に取り組んでいることにも驚いた。奨学生の興味は幅広く、最先端の学問の話から、気候変動などの環境問題、貧困や地方の過疎化などの社会問題など、奨学金委員会だけでお話を聞くにはあまりにもったいないほど素晴らしい。1期生の中西彩子さん（2017 工）がさつき会奨学金委員会に入り、さつき会奨学金制度やスカラーのネットワーク作りに貢献してくださっていることは望外の喜びである。

奨学金制度を立ち上げようとした頃は、原資の目処がたたず、そもそも始められるのか、たった月額3万円しか給付できないこの制度で何が変えられるのかと正直不安になったこともあった（東大側からはこの金額でも十分機能するとは言われたのだが）。しかし、だからこそ、「次世代を担う優秀な女子学生の背中を押す」という役目に集中できたことは良かった。3万円では足りなければ他の奨学金を取る努力をしてほしい、そのために私たちは他の奨学金と併用することを妨げないし（奨学金の中には併願できないものもある）、自分で活路を切り開けるように、女子学生の背中を一押ししたい、と思った。

「たとえ寄付が一銭も集まらなくても、ここにいる皆さんが100万円ずつ寄付すれば、奨学金制度が始められるから、とにかく始めましょうよ」と私が半ば冗談ながらも強引に話を切り出したにもかかわらず、「そうよね、いざとなったらその手があるわよね」と笑って前に進むことを許してくださった幹事の皆様の懐の広さに心から感謝している。東大基金からは「大丈夫、志が正しいからきっと寄付が集まるよ」と言っていただけなのに、集まるかどうか心配で、寄付の

お願い先リストを作って個人的に訪問していた。すると、当時東大基金の職員だった黒野優菜さん(2007 育)が、お願い先が重ならないようにと交通整理もしつつ、一人ひとりに丁寧にお声をかけてくださったお陰で、たくさんの方から寄付も集まった。

新しい試みにもかかわらず、さつき会奨学金制度がスピーディに立ち上がり、発展しているのは、まさしく関係者のダイバーシティのおかげである。皆さんが、実現に向けてご自身のスペシャリティを元に前向きにご対応してくださった。どなたが欠けても、このようにスムーズには作り上げられなかったであろう。関係者の方々に、この場を借りて深く感謝申し上げる。

しかしながら…女子学生は未だ 20%をちょっと超えたところで停滞している。もちろん奨学金制度だけで解決できることではない。しかし、島村口奨学金(入学した大学1年生を審査し、2年生から奨学金を授与する制度)の奨学生から、「高校時代にはさつき会奨学金のことを知りませんでした」と言われると、さつき会奨学金をその理念とともにもっと世間に知らしめ、制度を改善し続けることで、まだまだ達成できることはあるに違いない、と強く思うのであった。

もっともっと次世代を担う優秀な女子学生の背中を押したい、そのために引き続き皆さんのご援助をお願い申し上げます。

(8) 東京大学・さつき会奨学金制度の創設の経緯

1988年工卒 筑本知子

東京大学・さつき会奨学金制度が当初の目的であった期間の10年を超え、支援できる学生の数も当初の予想以上に拡大することが出来大変嬉しく思うとともに、このように制度を拡大できることができたのも、本制度の設立趣旨に賛同いただき、基金にご寄付いただいた多くの方のお陰と感謝しております。

さて、本制度の設立に向けての端緒を開いた一人として、創設の経緯を本稿にまとめさせていただきます。東京大学の女子学生を何らかの形で支援したいという話は、2011年に実施するさつき会創立50周年の記念行事の企画打ち合わせの中で最初に出たと記憶しております。時期的には2010年後半か2011年が明けた頃だったでしょうか。50周年企画のテーマは、「東京大学の女子学生比率30%達成に向けて」とすることで委員の意見が一致し、ではどうしたら東京大学の女子学生比率30%達成できるのだろうかという話になりました。そこで出てきた意見としては、「東大に進学したら幸せな人生が築けないという幻想があるのでは?」、「女性が東大に進学することのメリットがみえない」、「地方出身者にとっては、上京することの経済的負担が大きく、不安も大きい」などがありました。これらの対策として、(1)東大卒の女性の人生についての実態調査結果(2006年度実施)のとりまとめ、(2)ロールモデルの提示、(3)女子学生と親を対象にした説明会等の開催、(4)経済的支援(住宅支援や奨学金)などの案が出され、(1)~(3)については、それぞれ、さつき会データ集の発行、女子卒業生からのメッセージDVDの作成、及び東大オープンキャンパス2011と共催での「東大を受験してみよう」をテーマとしたパネルディスカッションの開催を50周年記念企画として実施いたしました。一方、(4)経済的支援(住宅支援や奨学金)については50周年企画として実施するには予算的にも難しいということで見送られることになりました。

さて、進学先を決めるにあたっては、地方出身者である私の実感として経済的な問題は大きな問題だと思っています。地方から東京に上京する場合には家賃等の負担が大きく、約10万円程度の仕送りが必要になります。(*日本学生支援機構の調査に基づく。)。日本の世帯年収の平均が約550万円ですので、家計収入の2割以上を仕送りに充てることになり、大変な負担となります。お子さんが複数いたら、さらに大変なことでしょう。お兄さんが東京の大学に行ったから、(女子の)自分は我慢させられたといった話も耳にします。自分自身は、弟が二人いるため、なるべく親に負担をかけたくないという気持ちで、大学入学が決まった後は、白金寮に入り、また静岡県出身者限定の給付型奨学金も受給しました。当時の白金寮の寮費は3,400円、給付型奨学金は3万円でしたので、それとアルバイトでほぼ仕送り無しで、学生生活を送ることができました。そのような経験、思いがあるからこそ、是非、女子学生対象とした奨学金を実現させたいという気持ちは捨てきれずにおりました。そのような思いを、50周年企画委員長であった堀井さんにお伝えしたところ、賛同いただいたのに勇気を得て、記憶が曖昧ですが、たぶん2月か3月ぐらいの幹事会か幹事MLかで、さつき会が主体で女子学生を対象とした奨学金制度を作ることを提案させていただいたと思います。提案理由は、さつき会が主体になる

ことで、後輩となる女子学生への応援メッセージにもなるでしょうし、さつき会自体の知名度を上げることにもなることをあげました。この時にさつき会の幹事メンバーがすごいなと思ったのは、それができない理由を探すのではなく、できる方法を考えるという方向に思考回路が働いたことです。奨学金への寄付を募るとして、さつき会ではその対応や寄付金の管理・運営をすることは到底無理ということで、東大基金や赤門学友会を巻き込むのが良いという話があり、それには、当時東大理事であった江川さんにコンタクトを取って相談したらということになり、早速メールを差し上げてご相談しましたところ、渉外担当の杉山副理事を窓口として対応いただくのご返答をいただきました。

そのような状況の中、東日本大震災（2011年3月11日発生）が起き、東北の太平洋沿岸部を中心にかなり大きな被害がありました。あまりの被害の大きさに衝撃を受け当初は何も考えられませんでした。その後、間もなく幹事の間で、震災被災学生の支援の必要性についての話が出てきました。2011年4月9日に開催された幹事会の議事録には「震災被災学生の学資援助について」についての議題が既に上っており、現在検討中のさつき会奨学金の設立は長期的視野として検討を続けるが、今回の震災に関しては短期の特別対応の位置付けて、4月15日（金）10:00～の大学との打ち合わせの結果に応じて、体制も含め、次回幹事会で継続議論する、とあります。

4月15日の杉山副理事との打ち合わせには、筑本その他、さつき会副代表幹事の太田さん、永沢さんのお二人が参加しました。そこで、杉山副理事より東大基金の仕組みについて、「基金の場合は東大がオペレーションを担当し、15%を管理費として東大が徴収する」こと、また、「震災被災者対応については、義捐金扱いか、奨学金とするかにより窓口が異なる」旨説明を受けました。

それを踏まえて、さつき会側で検討の結果、震災対応は即効性のある対応が必要なので、被災学生向け義捐金（一時金）と、一般的な奨学金を分けて考えることが良いと判断しました。まず被災者向け義捐金（一時金）については、対象者は多くても10名程度と考えられることから、予算としてはさつき会の繰越金から200万円程度を充当するとし総会で承認いただくこと、また、東大には募集案内、書類受付、選考、支給などの運営をお願いする方向で交渉することになりました。一方、奨学金については、50周年記念のキャンペーンとともに寄付金を募り、寄付の受付、管理は基金でお願いする方向で、継続検討となりました。

1ヶ月後の5月16日の東大との打ち合わせ（堀井、太田、永沢、筑本が出席）では渉外本部の吉田シニアディレクターの他、奨学厚生課の小野瀬課長及び市川さんにもご出席いただき、具体的な内容についての打ち合わせとなりました。まず震災対応については、給付基準は東日本大震災被災者に対する授業料免除に準じることとし、扱いとしては、義捐金の意味合いが強いため基金への振り分けはせず、さつき会からの寄付申込書で対応いただくことになりました。（したがって、安田講堂には「さつき会」名の寄付銘板があります）。募集要項は5月末までに決定し、6月から募集開始することになりました。一方、さつき会奨学金については、2012年7月末までに実施要項をまとめ、2013年4月からの支給を目指して寄付金集めを行うこ

ととなりました。

さつき会からの寄付による震災対応の奨学金の設立(2011年度限り)とさつき会奨学金の創設に向けての準備をすすめることについて、さつき会総会で会員の皆様の承認を得た後、震災対応については、「東日本大震災被災者特別援助・さつき会奨学金」(一時金として15万円給付)が創設され、3名の女子学生が採用され、9月28日に奨学金受給証書授与式が開催されました。



東日本大震災被災者特別援助・さつき会奨学金受給証書授与式

一方、さつき会奨学金の創設においては、堀井さん、大里さん、永沢さん(代表幹事)、清水さん、筑本の5名をメンバーとして奨学金準備委員会が発足し、実施要項の中身や寄付金を集めるためのプロモーションの方法等を検討することになりました。まずは、大里さんを中心に、どのぐらいの寄付金を集める必要があるのかの試算を行い、1年間に5人ずつ授与、5期にわたって行うのを前提にすると初年度には700万円集めることが最低ラインということで、寄付集めに必要なアクションの整理等を行いました。金融と事業経営のプロが集まっているので、全てがぱぱっと進んでいき、これもさつき会ならではの感心。

実施要項については、11月18日の東大との打ち合わせでだいぶ内容が固まりました。奨学金を作ろうと思いついた動機は、「東京大学の女子学生比率30%達成」だったこともあり、東大受験のモチベーションを高めるため受験前に奨学金の申し込みをしてもらい採用予定を決定する「高校予約型」を前提に、対象学生は「自宅通学外」、奨学金の併用可、学校推薦(校長先生の推薦書が必要)、選考方法は成績での選考は難しいため、作文等で選考するなどの基本方針が決まりました。

このような作業をしているなか、震災で延期となっていた東大オープンキャンパス2011が2011年12月23日に開催され、そこでのアンケート回答で地方からの参加者で奨学金の支援を希望する人が7名もいるという結果に、頑張って実現せねばと強く思いました。

さて、奨学金をスタートするには目標値である700万円の見通しを得る必要があります。

2012年1月13日の東大との打合せにおいては、東大職員でもありさつき会員でもある黒野さんとお会いし、寄付集めをスタートしている旨お聞きしました。また今後は依頼が重複しないように黒野さんと連絡を取り合いながら寄付依頼をおこなっていくことが確認されました。寄付集めに先立ち、さつき会としてはまずさつき会員全員を対象としたアンケート調査をすることにしました。アンケートの目的は、会員の寄付に対する意識調査と、奨学金プロジェクトに対する意見の募集です。副次効果として、会員に対する奨学金プロジェクトの認識向上も狙いました。アンケートの内容は、①奨学金への寄付の有無、②寄付の金額 ③寄付の回数 ④奨学金についての意見等の自由記述でした。実施期間が2/24-3/5と短かったせいか回答率は16.2%と高くありませんでしたが、単純に寄付金額を合計すると520万5千円であり、少額ながら継続して寄付したいという回答も多数ということで、見通しが少し立ってきたように感じました。自由記述では「私自身も奨学金とアルバイトで東大出ましたので、奨学金の必要性は人一倍感じております」「実際に学費が払えなくて大学を離れた学生も身近にいるが、何もしてあげられなかった。学ぶ気持ちの高い学生に是非わたるように援助してあげてほしい。」「OBが後輩を応援していることを示す絶好の機会。後輩達の未来をサポートできると嬉しいです。先輩達も応援してるよ!というメッセージを届けるきっかけになればと思います。」といった応援メッセージとともに、「一回限りの募金活動と異なり、継続させ、安定的に運営することは簡単ではないと思われます。基金を作っても利息で回せるのは難しい現在、どのくらいの規模で、どのような運営ができるのか、周到的な検討と準備が必要と思われます。」といった意見もいただき、制度設計をきちんとやらないと!と身が引き締まりました。

2012年7月末までに実施要項を決定するには、遡って4月にはほとんど内容を確定して幹事会承認を得て、5月のさつき発送時には総会で決議を得るための資料を同封、6月の総会では会員の皆様の承認を得なければなりません。2月、3月の頃にはかなりの高頻度でメールのやりとりもあり、また何度も夜に堀井さんのお宅に集まって(清水さんがいつもお弁当を買ってきてくださいました。また、堀井さんもあれこれ準備してくださいました。感謝。)、実施要項の骨子の作成や寄付のプロモーションのためのリーフレットの作成等々あれこれ打合せをしていました。実施要項に盛り込む内容として、私が特にこだわったのは、奨学生の応募資格に「採用後にさつき会が行う面談(年に1回を予定)に出席できる者」を入れることです。それにはいくつか理由があります。先に自分は学生時代に静岡県出身者限定の給付型奨学金を受給していたと書きましたが、その奨学金では毎月中野にある奨学金を設立された方のお宅に奨学生が集まって、夕飯(決まってカツとカレーでした)をいただきながら、当番制で最近興味をもって発表し、封筒に入れた奨学金をいただくことになっていました。出資者から直接お金を渡されることで、ありがたみを感じる事が出来ましたし、また奨学生の皆様と縦や横の繋がりをつくる事が出来、先輩からは大学生活のいろんなことを教えていただいたりしたのは大変有難いことでした。その経験があったからこそ、さつき会奨学金でも、奨学生同士が繋がりをつくれるような場を作りたいと思いましたし、また私たち奨学金委員会のメンバーとしても、奨学生たちがどのようなことに興味をもって大学生活を送っているのか、ちゃんと元気にやっているの

かを確認できる場があった方が良かったと思います。さつき会奨学生の対象者は地方出身者です。自宅から離れて一人暮らしをすることの心細さをそういう繋がりを作ることで解消できたらよいとも考えました。

3月26日開催のさつき会幹事会では、アンケート結果の紹介が功を奏し、それまで慎重な意見が多かった幹事の皆様から、現状の案について合意をいただくことができました。それを踏まえて4月中は総会用の資料を急ピッチで作成するとともに、奨学金の実施要項についての骨子案をもとに東大奨学厚生課の市川さんが作ってくださった文書の確認作業をすすめました。

寄付金のプロモーションのためのパンフレットや趣意書などの作成も急ピッチ。趣意書に載せる文章等について「東日本大震災被災者特別援助・さつき会奨学金」の受給者3名も大いに協力してくださり、総会にも参加してくださいました。

6月24日の総会で無事承認をいただき、奨学金準備委員会の「準備」がとれ、奨学金委員会として、降旗さん、高瀬さんを新たなメンバーとして加えスタートしました。一方、東大サイドでは実施要項・募集要項が7月24日の科所長会議にて承認をいただき、いよいよ「東京大学・さつき会奨学金」(以降、さつき会奨学金)として本格始動となりました。

これらが決まったところで、寄付金集めの活動の方にも力を入れることになり、寄付金集めの基金チームもさつき会の委員会として発足しました。パンフレットが8月末にできあがり、様々な団体の協力を得て大々的に配布をすることが出来ました。またさつき会員向けには、降旗さん、清水さんが担当して、さつき奨学金 NEWS をメールで定期配信。2012年9月11日の創刊号の配信のあと、月一回ないし二回のペースで2016年5月まで配信いただきました。(さつき奨学金 NEWS のバックナンバーは <https://www.satsuki-kai.net/scholarship/scholarshipnews-backnumber/> で読むことができます。)

当初懸念していた寄付も、2012年4月の募集開始から1年で3,000万円余りの暖かいご支援をいただき、制度として安定運営できる見込みが立ちました。これは、名簿を片手に多くのOBOGを訪問して、さつき会奨学金のことを紹介して寄附を募ってくださった吉田さん、黒野さんはじめ東大の渉外本部の皆様、様々な繋がりや寄附の呼びかけをしてくださったさつき会メンバーのご尽力があったからこそで、またそれに応えて趣旨に賛同してご寄附いただいた多くの方々がいらしたからと、大変感謝しております。

寄付の募集を開始してから11年が経ち、寄付の累計は5億円を超えました。特に、島村昭次郎様からは2014年より毎年継続して多額の寄附をいただき、「高校予約型」に加え、入学後学部1年の時に申込みができる「島村昭次郎記念口」(以降、島村口)を2016年に新設することが出来ました。また、2020年からはじまったコロナ禍による家計収入変化に対応した「東京大学さつき会応援奨学金」(一時金10万円を支給)を2020年秋に開設(2020年度限り)することが出来ました。その後、入学後に様々な事由により家計収入が変化し、学業の継続が困難になった事態に対応するため、島村口の募集対象を4年生(4年生は修士進学予定者のみ)まで拡大いたしました。また2019年からは「さつき会奨学生を卒業した高校等

に派遣し、東京大学入学後の経験やさつき会奨学金制度を高校生に紹介してもらうことで、さつき会奨学金制度の周知と東京大学への受験意欲の向上を図る」ことを目的に、さつき会奨学生を出身校に派遣する東京大学さつき会奨学生卒業校派遣制度を作り、何人かの奨学生がこの制度を活用して説明会を開催してくれています。

さつき会奨学金開設の動機となった「東京大学の女子学生比率 30%」は残念ながらいまだに達成されていません。いつの日か達成すると信じて、自分ができることを考えながら尽力していきたいと考えております。

(9) さつき会奨学金1期生としての歩み

中西彩子

私が初めて「さつき会」を知ったのは、2012年秋。私が高校3年生の時でした。当時の私は憧れの東京大学合格に向けて受験勉強に励んでいました。

「イギリス英語のリスニングがどうしても慣れないなあ、特訓！」

「無機化学の暗記が終わらない…！」

など、目の前のことで頭がいっぱいの私をよそに、両親は合格後の生活費のことを考えていて、さつき会奨学金をネットで見つけて私に教えてくれました。東京大学に進学したいという思いは絶対に譲れなかった上、両親も私のその気概を尊重して応援してくれていたものの、正直な所「東京という物価の高い所で、収入のない私が一人暮らしをさせてもらう」ことに対しては後ろめたい思いを感じていました。そのため私はすぐに奨学金に応募することを決め、応募に必要な推薦状・課題作文の準備をしました。さつき会から採用内定の通知をいただいたのはたしかセンター試験を控えた1月。嬉しさのあまり、より一層勉強に身が入りました。

なんとか現役で理科一類に入学できることが決まったときには本当に胸躍る思いで、「奨学金をいただきながら東大生活が送れる」ことを夢のように感じていました。ばたと上京準備を進めて2013年3月末に上京し、4月初のオリエンテーションや入学式、部活/サークルの新歓参加と次々イベントをこなし、わくわくの日々が少し落ち着いたところに奨学金授与式がありました。新生活の浮かれ気分がまだ残っていた私ですが、大学関係者も複数いらっしゃるフォーマルな場ということで緊張の面持ちで参加しました。最初は緊張のあまり自己紹介をうまく話せなかったりもしましたが、永沢さつき会代表幹事(当時)の朗らかな歓迎のお言葉にほっとしたことを覚えています。他の委員の方々の明るい雰囲気にも、大変安心感を覚えました。また奨学生同期は私含め3名で、この時が初顔合わせとなりました。女子校から(ほぼ女性がいらない)理科一類に進学した私にとって、さつき会で女子の友達ができたことはとても嬉しく、そして心強かったです。

それから修士課程卒業まで6年の間、毎年秋の面談やさつき会総会等のイベントで委員の皆さまと顔を合わせるたび、いつも優しく成長を見守っていただきました。学部3年生の時には、学部卒業後の進路(就職か大学院進学か)に悩み、同じ理系出身の委員の方に相談に乗っていただいたこともありました。また奨学生の規模としても、最初は1期生の3人でスタートし(初めての面談は少人数でお弁当を食べながら、非常に

アットホームな雰囲気での開催でした)、その後毎年新たな奨学生が加わったり島村昭治郎記念口が増設されたりと、年々大きくなっていくことを実感しました。そして修士課程卒業を控えていた2019年初に、委員の方から「奨学生面談への出席など可能な所から大丈夫なので、委員に加わってもらえないか？」と打診いただき、卒業後もさつき会奨学金に携われることを嬉しく思った私はすぐに快諾しました。そうして今、奨学生第1期生かつ奨学金委員としてこの寄稿を書くに至ります。

今あらためて振り返ると、私がさつき会奨学金をいただけて本当に良かったと思う理由が、経済的サポートの他にも2点あります。第一に、委員の皆さまを通じて女性のキャリアについて考える機会を早くから持てたこと。私は母が専業主婦ということもあり、大学入学当初は女性のキャリアについてあまり具体的なイメージがありませんでしたが、さつき会を通じて「世の中には仕事を通じて活躍している女性がこんなにいるのか」ということに気付かされました。自然と、自分の将来像を描けるようになりました。第二に、ネットワークが広がったこと。特に、国連公使などを歴任された(故)木全ミツさんにさつき会を通じて出会えたことは、今の私の価値観に大きく影響しています。今の私があるのは、さつき会奨学金のご縁があったゆえだと一切の誇張抜きに感じています。

あらためて、さつき会奨学金の創設にご尽力いただいた皆様、ご寄付くださった皆様、奨学金制度の運営やきめ細かい学生サポートを推進いただいた奨学金委員はじめ関係者の皆様に、心から感謝いたします。ありがとうございました。

今後は、在学中いただいたご支援を糧に一社会人として、一奨学金委員として、微力ながらもさつき会奨学金に恩返して参ります。

あとがき

さつき会奨学金を始めて10年になるから、何か記念事業をしたいよね、と奨学金委員会で話し始めたのがこの春のこと。イベントにするか、記録をまとめることにするか、関わりのあった方々にインタビューをしようか、寄付をしてくださった方々にはご連絡できるのかしら、シンポジウムの場所はどのような費用はどうする、東大事務局にはどこにどうやってご協力をお願いするのか、などなど、検討を重ね、記録とイベントの二本立て、奨学生と寄付者の交流を図る、との方針の下に計画を進めました。

最も気を遣ったのは、奨学生と寄付者の接触のあり方です。寄付者の方々には、奨学生はどのような学生で、どのような勉学や学生生活をしているのか是非直接ご覧に入れたいところ、寄付者と奨学生双方のプライバシーを守り、また、支配従属関係に陥ることのないように、座席配置や名札代わりの色分けリボンなどの工夫をいたしました。

懇親会では、各テーブルに来賓の方々、パネリストの方々も加わってくださり、会話が弾み、有意義な交流ができたと思います。

また、この報告書をまとめたことで、記録を遺すという目的も達成できました。

今年も多くの応募者がありましたが、東大女子を増やしたいというさつき会奨学金の目的の方は、まだまだ先が長いです。

引き続き、東大女子とさつき会奨学金への応援をお願いして、あとがきといたします。

さつき会 奨学金委員会 鵜瀬恵子